『陔餘叢考』訓譯卷七之下

中林史朗

今回は、岡田脩先生の退休記念號でもあり、昨年同様卷七（從一至十八）の殘り十二から十八編を登載させて頂く事とした。

毎回同じ事の繰り言に過ぎないが、擔當諸士の若々しいシャープな頭腦の切れに對して、案内人たる己の何と老いたる事か。古來「麒麟も老ゆれば駑馬と爲る」と言われているが、「駑馬が老ゆれば駑目駑馬と爲る」の見本を晒している己は、一體何であろうかと、自問自答を繰り返す日々である。兎に角學生諸士の努力には、敬服の一語に盡きる。まして本年は、小生はサバティカルで大學に不在である。何如に過去に讀み合わせした部分とは言え、原稿製作に携わる學生諸君の苦勞は、竝大抵ではない。改めて深謝の意を表する次第である。

この卷七の下を擔當された諸氏は、河井義樹（元・大學院博士後期課程生）・桑瀨明子（本學非常勤講師）・齋藤昭敏（元・大學院博士前期課程生）・關清孝（本學非常勤講師）・田中良明（大學院博士前期課程生）の五人（五十音順）である。

平成十八年季秋　　識於臺灣別業

【原文】

12　魏書

魏書自道武帝詔鄧淵著代記十餘卷太武帝又詔崔浩撰國書三十卷皆用編年體孝文帝詔李彪崔光改作紀傳彪後又有崔鴻王遵業續撰宣武帝又命邢巒追撰孝文起居注又有濟陰王暉業撰辨宗室錄此收書所本也收在魏末卽因高澄奏修國史迄齊文宣時始成衆口沸騰號爲穢史文宣敕魏書且勿施行此收初成之本也孝昭帝又詔收更加研審收奉詔頗有改正於是魏書遂行此收初改之本也武成帝又敕收更審收更有田換遂爲盧同立傳先特爲崔綽立傳至是綽反附出而楊愔傳又增有魏以來一家而已八字此收再改之本也後主緯天統五年以魏收爲尙書右僕射武平四年又詔史館更撰魏書按魏書李緯改作李系蓋以後主諱故避之則知後主時又經修改此又收三改之本也然則魏書在收一人

已四易稿而其書尚蕪雜若此信乎作史之難也隋時又有魏澹所撰魏史隋文帝以收書褒貶失實詔澹別撰其義例與收不同以西魏爲正東魏爲僞凡隣國之帝不書名太子則書字平文昭成獻明三帝稱謚餘不稱謚太武獻文被弑皆直書其事不存隱諱紀傳後不立論贊具見澹傳中當時號爲良史隋時又有盧彥卿撰後魏紀三十卷唐時又有張大素後魏書一百卷裴安時元魏書三十卷今皆不傳

【書き下し】

魏書は道武帝 鄧淵に詔し代記十餘卷を著せしめ、太武帝 崔浩に詔して國書三十卷を撰せしめて自り、皆編年體を用ふ。孝文帝 李彪・崔光に詔して改めて紀傳を作らしむ。彪の後、又崔鴻・王遵業有りて續撰す。宣武帝 又邢巒に命じて孝文起居注を追撰せしむ。又濟陰王 暉業有りて、辨宗室錄を撰せしむ。此れ收書の本づく所なり。收は魏末に在れば、卽ち高澄の奏に因りて國史を修め、齊の文宣の時に迄りて始めて成る。衆口沸騰し、號して穢史と爲す。文宣 敕して魏書は且らく施行すること勿れ。此れ收の初成の本なり。孝昭帝は又收に詔し、更に研審を加へしむ。收 詔を奉じて頗る改正すること有り。是に於て魏書 遂に行はる。此れ收の初改の本なり。武成帝 又收に敕して更審せしめ、收 更に回換すること有り。遂に盧同の爲に傳を立て、先づ特に崔綽の爲に傳を立て、是に至りて綽反て附出す。而して楊愔傳に又「有魏以來一家而已」の八字を增す。此れ收の再改の本なり。後主緯の天統五年、魏收を以て尚書右僕射と爲す。武平四年、又史館に詔し更に魏書を撰せしむ。按ずるに魏書の李緯 改めて李系に作るは、蓋し後主の諱を以ての故に之を避くれば、則ち後主の時又た修改を經るを知る。此れ又收の三改の本なり。然らば則ち魏書は收一人に在りて已に四たび稿を易ふるも、其の書は尚ほ蕪雜なること此くの若し。信なるかな作史の難きや。隋の時、又魏澹 撰する所の魏史有り。隋の文帝 收書は褒貶 實を失せるを以て、澹に詔して別に撰せしむ。其の義例 收と同じからず、西魏を以て正と爲し、東魏を僞と爲す。凡そ隣國の帝には名を書せず、太子には則ち字を書す。平文・昭成・獻明の三帝には謚を稱し、餘には謚を稱さず。太武・獻文 弑せらるは、皆其の事を直書し、隱諱を存せず。紀傳の後に論贊を立てざるは、具さに澹傳中に見ゆ。當時號して良史と爲す。隋の時 又盧彥卿有りて後魏紀三十卷を撰す。唐の時 又張大素の後魏書一百卷、裴安時の

元魏書三十卷有るも、今皆傳はらず。

【語注】

○鄧淵に……『魏書』卷二十四列傳第十二に、「太祖詔淵撰國記、淵造十餘卷。惟次年月起居行事而已、未有體例。淵謹於朝事、未嘗忤旨」とあり、同書卷三十五列傳第二十三に、「初、太祖詔尚書郎鄧淵著國記十餘卷。編年次事、體例未成。逮于太宗、廢而不述。神䴥二年、詔集諸文人撰錄國書。浩及弟覽・高讜・鄧穎・晁繼・范亨・黃輔等共參著作、敍成國書三十卷」と有る。○崔浩に……『魏書』卷一百四補列傳第九十二に、「始魏初鄧淵撰代記十餘卷、其後崔浩典史、游雅・高允・程駿・李彪・崔光・李琰之世修其業。浩爲編年體、彪始分作紀表志傳、書猶未出。世宗時、命邢巒追撰高祖起居注、書至太和十四年、又命崔鴻・王遵業補續焉。下訖肅宗、事甚委悉。濟陰王暉業撰辨宗室殂三十卷。收於是與通直常侍房延祐・司空司馬辛元植、國子博士刁柔・裴昂之・尚書郎高孝幹博總斟酌、以成魏書」とあり、『北齊書』卷三十七列傳第二十九にも同様の一文が見える。○孝文帝……『魏書』卷七下帝紀第七下に「十有二月、詔祕書丞李彪・著作郎崔光改析國記、依紀傳之體」と有る。○宣武帝……『北齊書』卷三十七列傳第二十九に「宣武時、命邢巒追撰孝文起居注、書至太和十四年。又命崔鴻王遵業補續焉。下訖孝明、事甚委悉。濟陰王暉業撰辨宗室錄三十卷」と有る。○武成帝……『北齊書』卷三十七列傳第二十九に「其後、羣臣多言魏史不實、武成復勑更審、收又回換。遂爲盧同立傳、崔綽返更附出」と有る。○盧同の……『魏書』卷七十七列傳第六十四。○楊愔傳……『北齊書』卷三十七列傳第二十九に「楊愔家傳、本云有魏以來一門而已、至是改此八字」と有る。○天統五年……『北齊書』卷八帝紀第八に「十二月庚午、以開府儀同三司・蘭陵王長恭爲尚書令。庚辰、以中書監魏收爲尚書右僕射」と有る。○然らば則ち……『北齊書』卷三十七列傳第二十九に「帝以魏史未行、詔收更加研審。收奉詔、頗有改正。及詔行魏史、收以爲直置祕閣、外人無由得見」と有る。○魏澹……『隋書』卷五十八列傳第二十三に「高祖以魏收所撰書、褒貶失實、平繪爲中興書、事不倫序、詔澹別成魏史」と有る。○盧彥卿……『舊唐書』卷一百八十九下列傳第一百三十九下に「盧粲、幽州范陽人。後魏侍中陽烏五代孫。祖彥卿、撰後魏紀二十卷。行於時、官至合肥令」と有る。○張大素の……『舊唐書』卷六十八列傳第十八に「次子大

素・大安、竝知名。大素、龍朔中歴位東臺舍人、兼修國史、卒於懐州長史。撰後魏書一百卷・隋書三十卷」と有る。○裴安時の……――『新唐書』卷五十八志第四十八藝文二に「裴安時史記纂訓二十卷。又元魏書三十卷」と有る。

【現代語譯】

『魏書』は道武帝が鄧淵に詔敕を下して『代記』十餘卷を著せさせ、太武帝がまた崔浩に詔敕を下して『國書』三十卷を敕撰させてから、皆編年體を用いている。孝文帝が李彪・崔光に敕命を下して改めて紀傳體を作らせた。李彪の後、また崔鴻・王遵業がいて續撰を編纂した。宣武帝はまた邢巒に命を下して『孝文起居注』を追撰させた。また濟陰王の暉業に『辨宗室錄』を敕撰させた。これは魏收の書の元となったものである。魏收は魏末にいたので、高澄の上奏に因りて國史を編纂し、北齊の文宣帝の時に至って始めて完成したものである。（この書について）民衆から穢史であるとの評判が沸き起こった。（そこで）文宣帝は『魏書』はしばらくの間、施行してはならない、との敕命を下した。これは魏收の初成の本である。孝昭帝はまた魏收に詔敕を下し、さらに檢討を加えさせた。魏收は詔敕を奉じて多くの改正を加えた。ここで『魏書』は遂に公刊された。これは魏收の初改の本である。武成帝はまた魏收に敕命を下して更に檢討を加え、そこで魏收はさらにその內容を取り替えることがあった。ついに盧同のために傳を立て、とりわけ崔綽のために傳を立て、ここで崔綽は附出した。そしてまた楊愔傳に「有魏以來一家而已」という八字を加えた。これは魏收の再改の本である。後主緯の天統五年、魏收は尙書右僕射となった。武平四年、また史館に詔敕を下し、さらに魏書を敕撰させた。考えてみるに『魏書』の李緯を改めて李系に作ったのは、おそらく後主の諱であることをその理由としてその文字を忌避したのであれば、後主の時もまた修改を經たものであることが分かる。これはまた魏收の三改の本である。であれば、『魏書』は魏收一人の手によってすでに四度も草稿を替えているにもかかわらず、その書はまとまりないことこの上ない。本當であることだなあ、歴史を編纂することの困難さというのは。隋の時、また魏澹の撰になる『魏史』がある。隋の文帝は、魏收の『魏書』はその褒貶が史實に從っていないということで、魏澹に敕命を下して別に編纂させた。その書の義例は魏收のものと同じではなく、西魏を正統とみなし、東魏

を異端とみなした。およそ隣國の帝に對してはその名を記さず、太子に對してはその字を記した。平文帝・昭成帝・獻明帝の三帝には謚を記し、その他には謚を記さなかった。太武帝・獻文帝が殺害されたことについては、ありのままの事實をすべて記し、隱諱を用いなかった。紀傳の後に論贊を立てなかったことについては、澹傳中に具體的に見えている。その當時は良史と稱された。隋の時、また盧彥卿がいて『後魏紀』三十卷を撰した。唐の時また張大素の『後魏書』一百卷、裴安時の『元魏書』三十卷があったが、これらは今皆傳わってはいない。

（河井　義樹）

【原文】

13　魏收書有後人所補者

魏書有不盡魏收原本者如孝靜帝紀武定二年以齊文襄王領侍中以今上爲僕射五年以太原公今上爲尚書令所謂太原公今上者卽文宣帝高洋也魏收作史時正在文宣帝之世故追敘魏事而曰今上也元象元年書侯景高敖曹圍獨孤如願於金墉城按獨孤如願卽獨孤信也其名曰信乃宇文泰所改也當金墉被圍時尚未改名故書其原名似非後人所追敘則亦可信爲魏收原本也又凡高歡辭相國辭九錫高澄辭相國等事皆大書特書以見其不失臣節而於歡之被挫於玉璧也則書齊獻武王圍玉璧以挑之寶炬黑獺不敢出略不見敗衂之迹似爲齊廻護者於澄之死也書齊文襄王薨於第略不見被刺之迹似爲齊隱諱者則更可信爲魏收仕齊時所作也然試以北史核對凡北史所採魏書大率存十之六七而文法亦多改易今此卷除所書齊事外其餘與北史字字相同毫無竄改且靜帝紀後備書高澄事帝之無狀斥帝爲狗脚朕令崔季舒歐帝三拳及澄入宮責帝反背并遜位後遇酖而崩之事使以爲收所作則收是時方諂齊之不暇而敢書此乎又孝靜后傳書帝被酖後后再嫁楊遵彥爲妻后卽高歡女文宣娣妹也收敢書此乎則魏書孝靜帝紀一卷及皇后傳一卷必非收原本乃後人反抄北史以補之者也然魏書孝靜紀內如高歡辭相國等事乃北史所無則又非全抄北史者劉貢父謂是時尚有高氏小史及修文殿御覽［亦北齊時書］後人取北史及此等書雜綴成篇以補魏書之缺理或然也孝靜紀及皇后傳外如昭成子孫傳一卷明元六王傳一卷景穆十二王傳上卷亦皆與北史相同毫無增損蓋亦取北史以補魏書也惟貢父謂第三卷太宗紀史館舊本上有白簽云此卷是魏澹史而按其書法與澹傳所載體例又不合較之北史亦不相同則此卷難確指爲非收原本也

【書き下し】

魏收の書に後人の補ふ所の者有り

魏書に盡くは魏收の原本ならざる者有り。孝靜帝紀に「武*定二年齊の文襄王を以て侍中を領し、今上を以て僕射と爲し、五年太原公今上を以て尚書令と爲す」の如きは、所謂太原公今上は卽ち文宣帝高洋なり。魏收の史を作るの時正に文宣帝の世に在り。故に魏の事を追敘して今上と曰ふなり。元象元年に「侯*景・高敖曹は獨孤如願を金墉城に圍む」と書す。按ずるに獨孤如願は卽ち獨孤信なり。其の名を信と曰ふは乃ち宇文泰の改むる所なり。金墉の圍まるるの時に當り、尚ほ未だ名を改めず。故に其の原名を書すは後人の追敘する所に非ざるに似たれば則ち亦た信じて魏收の原本と爲すべきなり。又凡そ高歡の相國を辭し、九錫を辭し、高澄の相國を辭する等の事は、皆大書特書し、以て其の臣節を失わざるを見す。而るに歡の玉璧に挫かるるに於けるや則ち「齊*の獻武王は玉璧を圍み、以て之に挑むも寶炬・黑獺敢て出でず」と書し、略ぼ敗衂の迹を見さざるは、齊の爲に廻護する者に似たり。澄の死に於けるや、「齊*文襄王は第に薨ず」と書し、略ぼ刺さるるの迹を見さざるは、齊の爲に隱諱する者に似たり。則ち更に信じて魏收の齊に仕へし時の作る所と爲すべきなり。然るに試みに北史を以て核對すれば凡そ北史の採る所の魏書は大率十の六七を存して文法も亦た改易多し。今此の卷の書する所の齊の事を除くの外、其の餘は北史と字字相ひ同じく毫も竄改無し。且つ靜*帝紀の後は高澄の帝に事へることの無狀にして、帝を斥して狗脚朕と爲し、崔季舒をして帝を歐らしむること三拳及び、澄の宮に入り、帝の反背を責め、并せて位を遜りて後の酖に遇ひて崩ずるの事を備書す。以て收の作る所と爲さしめば則ち收は是の時方に齊に諂ふに之れ暇あらずして敢て此を書せるか。又孝靜后傳は、帝の酖せられし後に「后*は再び楊遵彥に嫁し妻と爲る」と書す。后は卽ち高歡の女にして文宣の娣妹なり。收は敢て此れを書かんや。則ち魏書孝靜帝紀一卷及び皇后傳一卷は必ず收の原本に非ず、乃ち後人の反て北史を抄り以て之を補ふ者なり。然るに魏書孝靜紀の內、高歡の相國を辭す等の事の如きは乃ち『北史』の無き所なれば則ち又全くは北史を抄る者に非ず。劉*貢父は「是*の時尚ほ高氏小史及び修文殿御覽有り、[亦た北齊時の書」後人は北史及び此れ等の書を取り雜綴して篇を成し、以て魏書の缺を補ふ」と謂ふは理或ひは然り。孝靜紀及び皇后傳の外は昭成子孫傳一卷・明元六王傳一卷・

景穆十二王傳上卷の如きも亦た皆北史と相ひ同じく毫も增損無し。蓋し亦た北史を取り以て魏書を補ふなり。惟だ貢父は第三卷に「太宗紀は史館の舊本上に白簽有りて『此の卷は是れ魏澹の史なり』と云ふ」と謂ふ。而るに按ずるに、其の書法は澹傳の載する所の體例と又合はず。之を北史に較ぶるに亦た相ひ同じからざれば則ち此の卷は確指して收の原本に非ずと爲し難きなり。

【語注】

○武定二年齊…―『魏書』卷十二孝靜帝本紀の武定二年に「壬子、以齊文襄王爲大將軍、領侍中、其文武職事、賞罰衆典、詢稟之。中書監元弼爲錄尚書、左僕射司馬子如爲尚書令、以今上爲右僕射」と有り、五年に「甲辰、以太原公今上爲尚書令、領中書監、餘如故、詢以政事」と有る。○侯景・高敖…―『魏書』卷十二孝靜帝本紀に「行臺侯景司徒公高敖曹圍寶炬將獨孤如願於金墉、寶炬宇文黑獺竝來赴救」と有る。○齊の獻武王…―『魏書』卷十二孝靜帝本紀に「齊獻武王自鄴帥衆西伐、文襄王會于晉州。九月圍玉壁以挑之、寶炬黑獺不敢應」と有る。○齊文襄王は…―『魏書』卷十二孝靜帝本紀。○靜帝紀―『魏書』卷十二孝靜帝本紀に「帝好文學、美容儀。力能挾石師子以踰牆、射無不中。嘉辰宴會、多命羣臣賦詩、從容沉雅、有孝文風。齊文襄王嗣事、甚忌焉、以大將軍中兵參軍崔季舒爲中書黃門侍郎、令監察動靜、小大皆令季舒知。文襄與季舒書曰、癡人復何似、癡勢小差未。帝嘗與獵於鄴東、馳逐如飛。監衞都督烏那羅受工伐從後呼帝曰、天子莫走馬、大將軍怒。文襄嘗侍飲、大舉觴曰、臣澄勸陛下酒。帝不悅曰、自古無不亡之國、朕亦何用此活。文襄怒曰、朕朕狗脚朕。文襄使季舒毆帝三拳、奮衣而出。明日文襄使季舒勞帝、帝亦謝焉。賜絹、季舒未敢受、以啟文襄、文襄使取一段。帝束百匹以與之、曰、亦一段耳」と有る。○后は再び楊…―『魏書』卷十三孝靜皇后傳に「孝靜皇后高氏、齊獻武王之第二女也。天平四年、詔娉以爲皇后、王前後固辭、帝不許。興和初、詔侍中、司徒公孫騰、司空公、襄城王旭、兼尚書令、司州牧、西河王悰、兼太常卿及宗正卿元孝友等奉詔致禮、并備宮官侍衞、以后駕迎於晉陽之丞相第。五月、立爲皇后、大赦天下。齊受禪、降爲中山王妃。後降于尚書左僕射楊遵彥」と有る。○劉貢父―劉攽、字は貢父、宋の新喩の人。毛本『魏書』序の末に「而修史者言詞質俚、取捨失哀、其文不直、其事不核、終篇累卷、皆官爵州郡名號、雜以冗委瑣曲

之事、覽之厭而遺忘、學者陋而不習、故數百年間、其書亡逸不完者、無慮三十卷。今各疎于逐篇之末。然上繼魏晉、下傳周齊隋唐、六十年廢興大略、不可闕也。臣攽、臣恕、臣燾、臣祖禹、謹序目錄、昧死上」と有る。○是の時尚ほ……毛本『魏書』卷十三の卷末校語に「魏收書皇后傳亡、後人補以北史、又取高氏小史及修文殿御覽附益之」と有る。○太宗紀は史……毛本『魏書』卷三の卷末校語に「魏收書太宗紀亡、史館舊本帝紀第三卷上有白簽云、此卷是魏澹史。案隋書魏澹傳、澹之義例多與魏收不同、其一曰諱皇帝名、書太子字。二曰諸國君皆書曰卒。今此卷書封不同。隋書稱魏澹書甚簡要、不應如此重複乖戾。疑此卷雖存、亦殘缺脱誤」と有る。

【現代語譯】

『魏書』には一部魏收の原本でない部分が有る。孝靜帝紀に「武定二年に齊の文襄王に侍中を統べさせ、今上を僕射とし、五年に太原公今上を尚書令とした」というようなものは、所謂太原公今上は文宣帝高洋である。魏收が史書を作った時は正しく文宣帝の世であった。だから魏の事を追敘して今上と曰うのである。元象元年に「侯景と高敖曹は獨孤如願を金墉城で圍んだ」と書く。考えてみるに獨孤如願は獨孤信である。其の名前を信と曰うのはもともと宇文泰が改めたのである。金墉が圍まれた時に當っては尚お未だ名前を改めていない。だからその原名を書いてあるのは後人が追敘したのでないようであり、魏收の原本とすることが信じられる。又およそ、高歡が相國を辭し、九錫を辭し、高澄が相國を辭した等の事はすべて大々的にその臣たる節度を失っていないように書いている。しかし高歡が玉璧で挫かれた時の事は「齊の獻武王は玉璧を圍んで之に挑んだが、寶炬・黑獺は決して出てこなかった」と書き、ほとんど敗衂の形跡を示していないのは齊の爲に廻護したのだろう。高澄が死んだ時の事は「齊の文襄王は第で薨じた」と書き、ほとんど刺殺された形跡を示さないのは齊の爲に隱し避けたのであろう。だから（これらは）更に魏收が齊に仕えていた時の著作と信じられる。しかし試みに『北史』と比較してみると、だいたい『北史』が採った所の『魏書』はおおむね十分の六七くらいで、文法も亦た改易したところが多い。今『魏書』靜帝紀が載せている齊に關する事を除いては、其の他は『北史』と文字が互いに同じで少しも竄改していない。そのうえ靜帝紀の後は高澄が帝に事える

態度が無狀で、帝を指して狗脚朕とし、崔季舒に帝を三回毆らせたことや、高澄が宮中に入り帝の反背を責め、并せて位を遜った後に（孝靜帝が）酖を飲んで崩御した事なども書き備えている。もしこれらも魏收が著作したとするならば、この時魏收はちょうど齊に諂う餘裕がなくてむやみに書いてしまったのだろうか。又孝靜后傳では、帝が毒殺された後について「皇后は再び楊遵彦に嫁いでその妻となった」と書く。皇后は高歡の娘で、文宣の妹である。魏收はむやみにこのことを書こうか。この『魏書』孝靜帝紀一卷及び皇后傳一卷は絶對に魏收の原本にではなく、後人が反對に『北史』から『魏書』を補ったのである。しかし『魏書』孝靜紀の内の高歡が相國を辭した等の事などは『北史』には無いところであから全部が全部『北史』から取ったのではない。劉貢父が「是の時尚お『高氏小史』及び『修文殿御覽』があり、［亦た北齊時の書］後人は『北史』及び此れ等の書を取り、雜綴して篇を成して『魏書』の缺落を補った」と言っているのは理屈としてはもっともなことである。孝靜紀及び皇后傳の外は昭成子孫傳一卷・明元六王傳一卷・景穆十二王傳上卷なども亦たすべて『北史』と互いに同じで少しも增損がない。思うに、亦た『北史』を取って『魏書』を補ったのである。惟だ貢父は第三卷で「太宗紀は史館の舊本上に白簽があって『此の卷は魏澹の史である』と云う」といっている。しかし考えてみるに、其の書法は魏澹傳の載せている體例とは合わない。之を『北史』と比較してみると、これも互いに同じでないから此の卷はハッキリとは魏收の原本ではないと確信しがたい。

（齋藤　昭敏）

【原文】

14　魏書書法

魏書本紀兼載隣國興滅繼立等事最爲明晰然其書法妄自尊大惟西晉諸帝尚稱其帝號以拓跋之先本受職於司馬氏故書晉懷帝封祿官爲代公晉愍帝封猗盧爲代王不能沒也至書東晉元帝則已云司馬叡僭大位於江南其他如漢趙秦燕諸國斥之爲僭爲僞無更論矣然翳槐出奔尚依托石虎虎以兵納之始得歸國則猶附庸於石氏也而先已書石勒遣使求和拓跋珪幼時國破人散賴苻堅分劉庫辰衞辰爲二部珪得依於庫仁以長則猶臣服於苻氏也而燕鳳傳已書苻堅遣使朝貢珪因劉顯來逼遣安同等乞師於慕容垂則猶仰命於慕容氏也而已書慕容垂遣使朝貢此等書法在道武建號以後尚猶有說道武以前部落尚微追敘者獨不可少

爲貶損以從實乎至建號以後南北朝通使等事其於南使之來則書曰某遣某朝貢如登國六年晉司馬德宗遣使朝貢是也北使之去則書遣使於某如始光二年詔龍驤將軍步堆使於劉義符是也於宋齊諸帝皆書爲島夷如天賜元年島夷劉裕起兵誅桓元是也按節閔帝紀與梁通和詔有司不得復稱僞梁可見節閔以前國史所記本是如此然修史時何妨訂正北史於道武建號以前凡列國之事皆不書以魏方儕於列國也道武以後始兼書列國而書南北兩朝皆改隣國體較爲得當矣平文之殂魏書既云桓帝后以帝得衆心恐不利於己子遂害帝矣乃穆帝爲長子六修所弒但書帝討六修失利微服民間遂崩昭成爲皇子實君所弒亦但書帝至雲中崩道武爲清河王紹所弒亦但書帝崩於天安殿太武爲中常侍宗愛所弒亦但書帝崩於永安宮而俱不見致斃之跡此正如魏澹所云遭非命而不異考終使亂臣賊子從何而懼者北史於昭成則書皇子實君作亂帝暴崩於道武則書清河王紹作亂帝暴崩於太武則書中常侍宗愛搆逆帝崩庶不爲曲筆也又魏書於高齊事尤意存廻護高歡起兵以討爾朱氏爲名也則書齊獻武王以爾朱逆亂興義兵於信都又於魏朝加高歡官爵等事書齊獻武王固讓者不一而足孝武之被逼入關又書帝爲斛斯椿元毗王思政魏光詔佞間阻遂貳於齊獻武王而絶不著高歡跋扈犯上之迹其於京兆王瑜之子寶炬謂輕躁無行耽淫酒色是時寶炬已爲西魏文帝方與齊交爭故極詆之蓋收正仕於齊自不得不曲爲袒護固無足責也

【書き下し】

魏書の書法

魏書本紀は隣國の興滅繼立等の事を兼載すること、最も明晰爲り。然れども其の書法は妄自尊大。惟だ西晉諸帝のみ尚ほ其の帝號を稱するは、拓跋の先は本と職を司馬氏に受くを以てなり。故に「晉*の懷帝 祿官を封じて代公と爲す」、「晉*の愍帝 猗盧を封じて代王と爲す」と書すは、沒すること能はず。東晉の元帝を書しては、則ち已に「司*馬叡 大位を江南に僭す」と云ふに至り、其の他の漢・趙・秦・燕の諸國の如きは、之を斥して僭と爲し僞と爲し、更に論無し。然れども翳槐 出奔し、尚ほ石虎に依托し、虎 兵を以て之を納め、始めて歸國を得れば、則ち猶ほ石氏に附庸するなり。而るに先ず已に「石*勒 使を遣り和を求む」と書す。拓跋珪 幼き時、國破れ人散る。苻堅の劉庫辰・衞辰を分け二部と爲すに頼み、珪は庫仁に依りて以て長ずるを得ば、則ち猶ほ苻氏に臣服するなり。而るに燕鳳傳は已に「苻*堅 使を遣り朝貢す」と書す。珪は劉顯の來逼に因りて、安同等を遣り、師を慕容垂に乞ふは、則ち猶ほ命を慕容氏

に仰ぐなり。而るに已に「慕容垂 使を遣り朝貢す」と書す。此等の書法は、道武の建號以後に在りては、尚ほ猶ほ說有り。道武以前は部落 尚ほ微なり。追敘する者は、獨り少しく貶損を爲し以て實に從ふ可からざるか。建號以後に至りては南北朝の通使等の事、其の南使の來に於けるは、則ち書して「某 某を遣はして朝貢す」と曰ふ。登國二八年、晉の司馬德宗 使を遣り朝貢するが如きは是なり。北使の去は、則ち使を某に遣ると書す。始光二年、龍驤將軍步堆に詔して劉義符に使せしむが如きは是なり。宋齊諸帝に於ては皆書して島夷と爲す。天賜元年、島夷劉裕 兵を起こし桓元を誅すが如きは是なり。按ずるに節閔帝紀に「梁と和を通じ、有司に詔して復た僞梁と稱すを得ざらしむ。見る可し、節閔以前の國史の記す所は本と是れ此の如きを。然るに修史の時、何ぞ訂正を妨げんや。北史の道武建號以前に於ては、凡そ列國の事は皆な書さず。魏 方に列國に儕しきを以てなり。道武以後始めて列國を兼書して、南北兩朝を書すに皆な隣國の體に改むるは、較〻當を得ると爲す。平文の殂は、魏書 既に「桓帝后 帝の衆心を得るを以て己が子に利ならざるを恐れ、遂に帝を害す」と云ふ。乃ち穆帝 長子六修の弑する所と爲るは、但だ「帝 六修を討つも利を失ふ。民間に微服し、遂に崩ず」と書すのみ。昭成は皇子實君の弑する所と爲るも亦た但だ「帝 雲中に至りて崩ず」と書すのみ。道武の清河王紹の弑する所と爲るは、亦た但だ「帝 天安殿に崩ず」と書するのみ。太武の中常侍宗愛の弑する所と爲るは、亦た但だ「帝 永安宮に崩ず」と書するのみして、俱に斃を致すの跡を見さず。此れ正に魏澹の云ふ所の非命に遭ふも考終に異ならざれば、亂臣賊子をして何に從ひて懼れしめんの如き者なり。北史は昭成に於て則ち「皇子實君 亂を作す。帝 暴に崩ず」と書す。道武に於ては、則ち「清河王紹 亂を作す。帝 暴に崩ず」と書す。太武に於ては、則ち「中常侍宗愛 搆逆す。帝崩ず」と書す。曲筆を爲さざるに庶きなり。又魏書は高齊の事に於て、尤も意は廻護に存す。高歡 兵を起こし、以て爾朱氏を討ちて名を爲すなり。則ち「齊獻武王 爾朱の逆亂するを以て義兵を信都に起こす」と書す。又魏朝の高歡に官爵を加ふ等の事に於ては、「齊獻武王 固讓す」と書すは、一ならずして足る。孝武の逼られて關に入るは、又「帝 斛斯椿・元毗・王思政・魏光の諂佞間阻なるが爲に、遂に齊獻武王に貳す」と書して、絶へて高歡 跋扈して上を犯すの迹を著さず。其の京兆王瑜の子寶炬に於ては

「*輕躁無行、酒色に耽淫す」と謂ふ。是の時、寶炬 已に西魏の文帝と爲り、方に齊と交爭す。故に之を極詆す。蓋し收は齊に仕ふ。自ら曲げて袒護を爲さざるを得ず。固より責むるに足る無きなり。

【語注】

○晉の懷帝……『魏書』卷一序紀穆帝本紀に「晉懷帝進帝大單于、封代公」と有る。○晉の愍帝……『魏書』卷一序紀穆帝本紀に「八年、晉愍帝進帝爲代王、置官屬、食代・常山二郡」と有る。○司馬叡……『魏書』卷一序紀に「是年、司馬叡僭稱大位於江南」と有る。○石勒 使を…『魏書』卷一序紀平文皇帝紀に「三年、石勒自稱趙王、遣使乞和、請爲兄弟。帝斬其使以絕之」と有る。○苻堅 使を……『魏書』卷二十四燕鳳傳に「苻堅遣使牛恬朝貢、令鳳報之」と有る。○慕容垂 使……『魏書』卷二太祖本紀に「登國元年…八月…遣行人安同・長孫賀使于慕容垂以徵師、垂遣使朝貢、幷令其子賀驎帥步騎以隨同等。冬十月、賀驎軍未至而寇已前逼、於是北部大人叔孫普洛等十三人及諸烏丸亡奔衞辰。帝自弩山遷幸牛川、屯于延水南、出代谷、會賀驎於高柳、大破窟咄。窟咄奔衞辰、衞辰殺之、帝悉收其衆。十二月、慕容垂遣使朝貢、奉帝西單于印綬、封上谷王。帝不納。是歲、慕容垂僭稱皇帝於中山、自號大燕」と有る。○登國六年……『魏書』卷二太祖本紀に「天興…六年…冬十月…丁巳、詔將軍伊謂率騎二萬北襲高車。司馬德宗遣使朝貢」と有る。○始光二年…『魏書』卷四上世祖本紀上に「夏四月、詔龍驤將軍步堆・謁者僕射胡覲使於劉義隆」と有る。○天賜元年……『魏書』卷二太祖本紀に「天賜元年…是歲、島夷劉裕起兵誅桓玄」と有る。○桓帝后……『魏書』卷一序紀平文皇帝本紀に「五年、僭晉司馬叡遣使韓暢加崇爵服、帝絕之。治兵講武、有平南夏之意。桓帝后以帝得衆心、恐不利於己子、害帝、遂崩、大人死者數十人。天興初、尊曰太祖」と有る。○帝 六修を……『魏書』卷一序紀穆帝本紀に「九年、帝召六脩、六脩不至。帝怒討之、失利、乃微服民間、遂崩。普根先守外境、聞難來赴、攻六脩滅之。衞雄・姬澹率晉人及烏丸三百餘家、隨劉遵南奔幷州。普根立月餘而薨。普根子始生、桓帝后立之。其冬、普根子又薨。是年、李雄遣使朝貢」と有る。○帝 雲中に……『魏書』卷一序紀昭成皇帝本紀に「三十九年…十二月、至雲中、旬有二日、帝崩、時年五十七。太祖卽位、尊曰高祖」と有る。○帝 天安殿に……『魏書』卷二太祖本紀に

「天賜…六年…冬十月戊辰、帝崩於天安殿、時年三十九。永興二年九月甲寅、上謚宣武皇帝、葬於盛樂金陵、廟號太祖。泰常五年、改謚曰道武」と有る。○帝 永安宮に…――『魏書』巻四下世祖本紀に「正平…二年春正月庚辰朔、南來降民五千餘家於中山謀叛、州軍討平之。冀州刺史、張掖王沮渠萬年與降民通謀、賜死。三月甲寅、帝崩於永安宮、時年四十五。祕不發喪、中常侍宗愛矯皇后令、殺東平王翰、迎南安王余入而立之、大赦、改元爲永平、尊皇后赫連氏爲皇太后。三月辛卯、上尊謚曰太武皇帝、葬於雲中金陵、廟號世祖」と有る。○皇子實君…――『北史』巻一魏本紀昭成帝本紀に「三十九年、苻堅遣其大司馬苻洛帥衆二十萬及其將朱彤・張蚝・鄧羌等諸道來寇、王師不利。帝時不豫、乃率國人避於陰山之北。高車雜種盡叛、四面寇抄、不得芻牧、復度漠南。堅軍稍退、乃還。十二月、至雲中。旬有二日、皇子寔君作亂、帝暴崩、時年五十七。道武卽位、尊曰高祖」と有る。○清河王紹…――『北史』巻一魏本紀太祖道武帝本紀に「天賜…六年…十月戊辰、清河王紹作亂、帝崩於天安殿、時年三十九。永興二年九月甲寅、上謚曰宣武皇帝、葬于盛樂金陵廟、號太祖、泰常五年改謚曰道武」と有る。○中常侍宗愛…――『北史』巻二世祖太武皇本紀に「正平…二年…三月甲寅、中常侍宗愛構逆、帝崩於永安宮、時年四十五。祕不發喪。愛又矯皇后令、殺東平王翰、迎南安王余立、大赦、改元爲永平。尊謚曰太武皇帝、葬於雲中金陵、廟號世祖」と有る。○齊獻武王 爾…――『魏書』巻十一廢出三帝紀前廢帝廣陵王紀に「六月庚申、齊獻武王以尒朱逆亂、始興義兵於信都」と有る。○齊獻武王 固…――『魏書』巻十一廢出三帝紀出帝平陽王紀に「中興二年…五月…戊戌、以齊獻武王固讓、聽解天柱大將軍、減封五萬戶、餘悉如故」と有る。○帝 斛斯椿…――『魏書』巻十一廢出三帝紀（出帝平陽王紀）に「時帝爲斛斯椿、元毗、王思政、魏光等諂佞閒阻、貳於齊獻武王、託討蕭衍、盛暑徵發河南諸州之兵、天下怪惡之」と有る。○輕躁無行…――『魏書』巻二十二孝文五王列傳京兆王傳に「寶月弟寶炬、輕躁薄行、耽淫酒色。孝莊時、特封南陽王。從出帝沒於關西。宇文黑獺害出帝、寶炬乃僭大號」と有る。

【現代語譯】

『魏書』の本紀は、隣國の興滅や王の移り變わり等のことを併せて記錄することが、最も明らかである。そうであってもその書法は妄りに自身のみを優れたものとして、他を

輕んじている。しかし西晉の歴代皇帝に對してだけ依然として帝號で稱しているのは、拓跋氏の祖先が、もともと司馬氏に職を與えられたとしているためである。そのため「晉の懐帝が祿官を封じて代公とした」や、「晉の愍帝が猗盧を封じて代王とした」と記しているのは、無くすことが出來ないからだ。東晉の元帝を記述するには、「司馬叡が大位を江南で僭稱した」と記すようであり、その他の漢・趙・秦・燕の諸國のなどは、これらを僭や僞としており、そのことはさらに論じるまでもない。そうであっても翳槐が出奔し、石虎に身を寄せ、虎が兵で翳槐をかくまり、始めて歸國することができたのならば、石氏に雇われていたのだ。そうであるのに「石勒が使を送り和睦を求めた」と記している。拓跋珪が幼い時、國は破れ人々は散り散りになった。苻堅が劉庫辰・衞辰を分けて二部にしたのを頼み、珪は庫仁に身を寄せて、そこで成長したのであるから、苻氏に臣服していたようなものだ。そうであるのに燕鳳傳では「苻堅が使者を遣わして朝貢した」と記している。（また）珪は劉顯が侵攻してきたので、安同たちを使者として送り、援軍を慕容垂に求めた、これは慕容氏に命をあづけているのだ。そうであるのに「慕容垂が使者を遣わして朝貢した」と記している。此等の書法は、道武帝が帝號を立てた後では、さらに說明が必要である。道武帝以前は小さな集團であった。これを敍述する者は、どうして貶めることを少なくし、事實に沿った記述ができないのか。帝號を立てた以後は南北朝の通使などの事で、南からの使者が來た際には、「某が某を使いに出し朝貢した」と記している。例えば「登國六年、晉の司馬德宗が使者を遣わせて朝貢にきた」というのがそうである。北からの使者が行く際には、使者を某に遣ると記している。例えば「始光二年、龍驤將軍步堆に詔を出して劉義符に使者として行かせた」というのがそうである。宋・齊の歴代皇帝は全て「島夷」と記している。例えば「天賜元年、島夷の劉裕が兵を起こして桓玄を討伐した」というのがそうである。考えるに節閔帝紀に「梁と和睦したので、有司に詔を出して僞梁と記すことをさせなかった」とある。ここから節閔帝以前の國史の論述の基準は元々このようであったことがわかるのである。そうであるのに修史の時に、どうして訂正を妨げたのか。『北史』が道武帝の帝號を立てる以前は、列國の事は全て記述しなかった。魏を他の列國と同じように扱っているからである。道武帝以後は始め列國と共に記し、南北兩朝を

記す時は隣國を記すように形を變えさせたのは、多少は的を得ている。平文皇帝の死は、『魏書』に「桓帝后は平文皇帝が人々の心をとらえたので、自分の子供にとって利益にならないと恐れて、とうとう皇帝を殺害した」と記している。また穆帝が長子六修に弒殺されたことは、ただ「帝が六修を討伐するも利を失った。民間に忍び隠れ、その後亡くなった」と記すだけである。昭成が皇子實君に弒殺されたことも、ただ「帝が雲中に至ってなくなられた」と記すだけである。道武帝が清河王紹に弒殺されたことは、これもまた「皇帝が天安殿で亡なられた」と記すだけである。太武帝が中常侍宗愛に弒殺されたことも、また「帝が永安宮で亡くなられた」と記すだけであり、いずれも死に至らせた事跡を記していない。これはちょうど魏澹が言った「横死を遂げたのにもかかわらず天壽を全うしたような書き方で、亂臣賊子にどういうことで懼れさせることができようか」の様なことである。『北史』が昭成の死について、「皇子實君が亂を起こした。帝は、にわかに亡くなられた」と記す。道武帝については、「清河王紹が亂を起こした。帝は、にわかに亡くなられた」と記す。太武については、「中常侍宗愛が謀反を企てた。帝は亡くなられた」と書す。事實に沿って書いていることに近い。また『魏書』は高氏の北齊の事について、注意して擁護して記している。高歡が兵を起こして、爾朱氏を討伐し名聲を揚げたことは、「齊獻武王は爾朱が反逆したので、信都で義兵を起こした」と記す。また魏朝が高歡に官爵を與えた事について、「齊獻武王は固辭した」と記しているのは、一つだけではない。孝武が入關されるまで侵攻されたのは、又「帝は斛斯椿・元毗・王思政・魏光らが媚びへつらい他を近づけないようにしたので、とうとう齊獻武王に二心を抱くようになった」と記したのに、高歡が思うように振る舞い、上の者を犯すことを平氣でやった事は全く著述していないのである。その京兆王瑜の子の寶炬については「行いが輕薄で、酒と女に耽溺している」と記す。是の時、寶炬は已に西魏の文帝になっており、北齊と抗爭していた。だから激しく誹っているのである。思うに魏收は北齊に仕えた。だから自然と事實を曲げ不正を庇護してしまうのだ。だから責任を追及するのに足らないのである。

（關　清孝）

【原文】

15　魏書蕪冗處

魏書最爲蕪冗尤可厭者一人立傳則其子孫不論有官無官有功績無功績皆附綴於後有至數十人者如陸俟傳載其子孫馥琇等十六七人李順傳載其子孫敷式等二十餘人以及盧元李靈崔逞封彝皆載其子孫宗族數十人一似代人作家譜者所載之人別無可紀但敘其官閥一二語而已則何必多費筆墨耶當時陸操嘗病其敘諸家枝葉過爲繁碎魏收謂因中原喪亂譜牒遺亡是以具書支派此雖見其採輯之本意而不盡然也蓋傳中諸人子孫多與收同時收特以此周旋耳齊書魏收傳稱收修史時凡同修者祖宗姻戚多被書錄飾以美言與陽休之善則爲其父固作佳傳固曾以貪虐爲中尉李平所劾而收書云固在北平甚有惠政李平深相敬重又嘗納爾朱榮子金故減榮之惡傳論云若修德義則韓彭伊霍夫何足數可見收修書全以公事市私情而其時同修史者亦互相牽附北史刁柔傳云柔與收同修魏史志在偏黨凡其內外通親並虛美過實此皆當日阿狥情事也乃李延壽修北史已在唐時與諸人子孫渺不相接可以無所瞻狥何以亦仍魏書之舊臚列不遺耶

【書き下し】

魏書の蕪冗の處

魏書は最も蕪冗と爲す。尤も厭ふ可き者は、一人に傳を立つれば、則ち其の子孫も、官有ると官無きと、功績有ると功績無きとを論ぜず、皆後に附綴して數十人に至る者有るなり。陸*俟傳に其の子孫 馥・琇等十六七人を載せ、李*順傳に其の子孫 敷・式等二十餘人を載せ、以て盧*元・李靈・崔逞・封彝の、皆其の子孫宗族數十人を載するに及ぶが如きは、一に人に代りて家譜を作る者の似し。所載の人も別に紀す可きこと無く、但だ其の官閥を敘すること一二語なるのみなれば、則ち何ぞ必ずしも多く筆墨を費さんや。當*時、陸操 嘗て其の諸家の枝葉を敘すること、過だ繁碎爲るを病とするに、魏收「中原の喪亂に因り譜牒 遺亡す。是を以て具さに支派を書す」と謂ふは、此れ其の採輯の本意を見すと雖も、而れども盡くは然らざるなり。蓋し傳中の諸人の子孫、多く收と時を同じくすれば、收は特だ此を以て周旋するのみ。齊書魏收傳に「收*史を修むる時、凡そ修を同じくする者は、祖宗・姻戚 書錄を被ること多し。飾るに美言を以てす。陽休之と善ければ、則ち其の父固の爲に佳傳を作る。固は曾て貪虐を以て中尉李平の劾する所と爲る。而るに收の書には『固*は北平に在りて甚だ惠政有り。李平は深く相敬重す』と云ふ。又嘗て爾朱榮の子に金

を納れらるるが故に、榮の惡を減じ、傳論には『若し徳義を修むれば、則ち韓・彭・伊・霍、夫れ何ぞ數ふるに足らん』と云ふ」と稱せば、見る可し、收 書を修むるに、全く公事を以て私情を市るを。而ち其の時同に史を修むる者も、亦た互に相牽附す。北史刁柔傳に「柔は收と同に魏史を修む。志 偏黨に在り、凡そ其の内外の通親、並な虛美實に過ぐ」と云ふは、此れ皆當日阿狥の情事なり。乃るに李延壽 北史を修むるは已に唐の時に在れば、諸人の子孫とは渺として相接せず、以て瞻狥する所無かる可きに、何を以て亦た魏書の舊に仍り、臚列して遺さざるや。

【語注】

○陸俟傳に……『魏書』卷四十陸俟傳。○李順傳に……『魏書』卷三十六李順傳。○盧元・李靈……『魏書』卷三十五盧玄傳、卷三十七李靈傳、卷三十二崔逞傳及び封彝傳。○當時、陸操……『北齊書』卷三十七魏收傳に「尚書陸操嘗謂愔曰、魏收魏書可謂博物宏才、有大功於魏室。愔謂收曰、此謂不刊之書、傳之萬古。但恨論及諸家枝葉親姻、過爲繁碎、與舊史體例不同耳。收曰、往因中原喪亂、人士譜牒、遺逸略盡、是以具書其支流。望公觀過知仁、以免尤」と有る。○收 史を修……『北齊書』卷三十七魏收傳に「修史諸人祖宗姻戚多被書錄、飾以美言。…初收在神武時爲太常少卿修國史、得陽休之助、因謝休之曰、無以謝德、當爲卿作佳傳。休之父固、魏世爲北平太守、以貪虐爲中尉李平所彈獲罪、載在魏起居注。收書云、固爲北平、甚有惠政、坐公事免官。又云、李平深相敬重。尒朱榮於魏爲賊、收以高氏出自尒朱、且納榮子金、故減其惡而增其善、論云、若修德義之風、則韋・彭・伊・霍夫何足數」と有る。○固は北平に……『魏書』卷七十二陽固傳。○若し徳義を……『魏書』卷七十四尒朱榮傳に「向使榮無姦忍之失、修德義之風、則彭・韋・伊・霍、夫何足數」と有る。○韓・彭・伊……韓・彭・伊・霍とは、漢の高祖の臣であった韓信と彭越、殷の湯王の臣伊尹と漢の霍光。この「韓彭」は、中華書局本『北齊書』卷三十七魏收傳では、三朝本・百納本に從い「韋彭」に改め、彭を大彭、韋を豕韋（共に傳說中の商代の覇主）と解釋する。『北史』卷五十六魏收傳も同じ。また『魏書』卷七十四尒朱榮傳は「彭韋」に作る。ただし趙翼が見たと思われる毛氏汲古閣本に於ては、本書と同じく「韓彭」に作る。○柔は收と……『北史』卷二十六刁柔傳。刁柔、字は子溫。『北史』卷二十六に傳有り。

【現代語譯】

『魏書』は最も蕪冗である。とりわけ厭うべきであるのは、一人に傳を立てる場合、その子孫も、官の有無や功績の有無を考慮せずに、皆後に附記して、數十人に至る者があることである。陸俟傳にその子孫 馥・琇等十六七人を載せ、李順傳にその子孫 敷・式等二十餘人を載せ、さらに盧元・李靈・崔逞・封彝（の諸傳）が、いずれもその子孫宗族數十人を載せるに及んでいるようなものは、ひとえにその人に代ってあたかも家譜を作っているかのようである。載せている人物にしても、特別に記すべき事柄は無く、ただその官閥を一二語記載している程度であれば、一體どうしてこれほど筆や墨を浪費する必要があるのであろうか。當時、陸操がその諸家の子孫についての記述を、餘りに繁碎であると批判した際に、魏收が「中原の喪亂の爲に、譜牒が失われてしまった。それゆえ詳細に支派を記したのだ」といったのは、これはその採輯の本意を示しているとはいえ、しかしながら、完全には言葉通りでは無い。思うに、傳中の諸人の子孫は、多くが魏收と同時代に生きており、彼はただそれらを取り持っていただけである。『（北）齊書』魏收傳に「魏收が史を編纂していた時、大半の同僚は、祖宗・姻戚が史書に記載を被ることが多く、美言で脚色された。陽休之と親しかったので、その父固の爲に立派な傳を作った。固は以前、貪虐さを中尉の李平に非難されたことがあった。そうであるのに『魏書』では『固は北平に在って甚だ惠政を施した。李平は深く敬い重んじた』といっている。更に以前、爾朱榮の子から金錢を受けとった爲に、彼の惡を減じ、傳論では『もし德義を修めたならば、韓・彭・伊・霍も、そもそも一體どうして數えるに足るものか』といった」とあれば、魏收が史書を編纂しながら、完全に公事を以て私情を賣り買いしていたことが分かるのである。とりもなおさず、その時共に史書を編纂していた者も、これまた互いに迎合していた。『北史』刁柔傳に「柔は收と共に魏史を編纂した。志は偏っており、およそその內外の親しい者に關しては、みな實態を無視して虛飾の辭を連ねてある」とあるのは、これは皆當時の迎合の有樣である。しかし（あくまで）李延壽が『北史』を編纂したのは既に唐の時代であるから、諸人の子孫とは遠く隔たっており、もはや追從する必要も無いのに、一體どうしてまた『魏書』の舊文に依據したまま餘さず臚列したのであろうか。

（桑瀨　明子）

【原文】

16　北齊書

北齊書亦有數卷亡失而後人取北史以補之者試以北史核對便自了然蓋北史雖據各史修成而其間剪裁增損必大同小異斷無有一字不差者今北齊書本紀內惟文宣紀與北史繁簡互殊其爲原書無疑神武及文襄紀之前半篇及廢帝孝昭武成後主緯等紀則與北史字字相同此必非原本也文宣紀後一論孝昭紀後亦一論而孝昭論前半篇仍是文宣論核之北史文宣孝昭二帝總論則一字不差蓋北齊書孝昭紀與論俱亡後人遂取北史內孝昭紀論補之而論內又未刪去文宣半篇以致兩卷之間文宣論複出也武成紀一卷無論後主紀一卷有論而其論係武成後主合爲一論核之北史二帝同卷之總論亦一字不差此亦取北史補之但分卷未分論也皇后傳亦與北史字字相同惟北史於后傳外兼傳妃嬪此則但有后傳無妃傳蓋亦從北史內摘出后傳而不及妃嬪耳其諸王傳北齊書高祖十一王爲一卷無論文襄六王爲一卷無論文宣孝昭武成後主諸子合爲一卷則有論其論却合文襄諸子在內核之北史亦字字相同蓋北史自文襄諸子至後主諸子本合爲一卷故合爲一論而補書者但取北史各傳分爲二卷而論未及分故文襄諸子有傳無論文宣以下諸子有論而又兼文襄諸子也其宗室傳則趙郡清河二王另爲一卷其文字與北史繁簡各殊傳後一論專爲二王其爲北齊書原本無疑其他則亦從北史抄出但分卷小異耳北史齊宗室與神武諸子同卷北齊書以神武諸子爲一卷列于文襄諸子前而宗室傳另爲二卷次於後主諸子後除趙郡清河一卷外其餘諸傳亦與北史字字相同蓋北齊原書紀傳多有亾失而目錄具在補書者摘北史以湊合原書卷數也惟文襄紀後半篇與北史迥異又語無倫次亦必非北齊書原本自武定五年文襄辭丞相以後據北史尚有兩年之事至武定七年八月始被盜刺死今文襄紀則辭丞相後即敘其致侯景書及景答書下即敘文襄無禮於魏靜帝之事又不書明年月但云七月還晉陽遇盜而殂則似文襄之卒在武定六年矣且文襄卒於鄴而此云還晉陽遇盜殂則又似卒於晉陽矣按文襄與侯景往復書本在梁書景傳內文襄無禮於靜帝之事本在北史靜帝紀內［此事本在北齊書高德政傳內北史於德政傳刪之而著於紀］其被蘭京刺死一事亦即在北史文襄紀內蓋補書者全用北史恐人見其抄襲之迹故於此紀雜取諸書成篇以示小異而不知其蕪雜不倫也

按唐初雖修成梁陳周齊諸史自有南北史出而諸史皆不行自非大力藏書家罕有能備之者今所傳後魏書北齊書皆宋初取內府本并募天下善本校正刊行觀於胡安國等序後周書謂仁宗出太清樓本合史館秘閣本又募天下獻書得夏竦李巽兩家本始校正鏤板以行是內府之臧天下之大不過此

數本周書如此魏齊書亦可知有宋鏤板時度亦必購募以校其缺軼而已遺失若此可見唐時諸史之流傳於世本自無多也今諸史徧天下而世罕有知其殘缺取北史補成之事則未嘗取南北史核對耳

【書き下し】

北齊書

北齊書も亦た數卷亡失して後人の北史を取りて以て之を補ふ者有り。試みに北史を以て核對すれば便ち自ら了然たり。蓋し北史は各史に據り修成すと雖も而れども其の間に剪裁增損必ず大同小異あれば、斷じて一字として差はざる者有る無し。今北齊書本紀内は惟だ文宣紀のみ北史と繁簡互殊すれば、其れ原書爲ること疑ひ無し。神武及び文襄紀の前半篇及び廢帝・孝昭・武成・後主緯等の紀は則ち北史と字字相ひ同じく、此れ必ず原本に非ざるなり。文宣紀の後の一論・孝昭紀の後も亦た一論にして孝昭の論の前半篇は仍ほ是れ文宣の論なり。之を北史の文宣・孝昭の二帝の總論に核すれば則ち一字も差はず。蓋し北齊書孝昭紀は論と俱に亡び、後人遂に北史内の孝昭の紀論を取り之を補ふ。而るに論内又未だ文宣の半篇を刪去せざれば、以て兩卷の間に文宣の論の複出を致すなり。武成紀一卷に論無く、後主紀一卷に論有りて其の論は武成・後主に係り合して一論と爲す。之を北史の二帝の同卷の總論に核すれば亦た一字として差はず。此れ亦た北史を取り之を補ふ。但だ卷を分かつも未だ論を分かたざるなり。皇后傳も亦た北史と字字相ひ同じ。惟だ北史は后傳に於て外に兼ねて妃嬪を傳す。此れ則ち但だ后傳有りて妃傳無く、蓋し亦た北史内より后傳を摘出して妃嬪に及ばざるのみ。其れ諸王傳は、北齊書は高祖十一王を一卷と爲し論無く、文襄六王を一卷と爲し論無く、文宣・孝昭・武成・後主の諸子は合して一卷と爲し則ち論有り。其の論は文襄の諸子を却合し内に在り。之を北史に核すれば亦た字字相ひ同じ。蓋し北史は文襄の諸子より後主の諸子に至るまで本合して一卷と爲すが故に合して一論と爲す。而して書を補ふ者は但だ北史の各傳を取り、分けて二卷と爲すも論は未だ分かつに及ばず。故に文襄の諸子に傳有るも論無く、文宣以下の諸子に論有りて又文襄の諸子を兼ぬるなり。其の宗室傳は則ち趙郡・清河の二王は另に一卷と爲し、其の文字は北史と繁簡各々殊にす。傳後の一論は專ら二王の爲にして其れ北齊書の原本爲ること疑ひ無し。其の他は則ち亦た北史より抄出し、但だ卷を分

くるに小異するのみ。北史は齊の宗室と神武の諸子とは卷を同じくし、北齊書は神武の諸子を以て一卷と爲し、文襄の諸子の前に列ねて宗室傳は另に二卷と爲し、後主の諸子の後に次す。趙郡・清河の一卷を除くの外は、其の餘の諸傳も亦た北史と字字相ひ同じ。蓋し北齊原書の紀傳に多く亾失有るも目錄は具に在れば書を補ふ者は北史を摘みて以て原書の卷數に湊合するなり。惟だ文襄紀後半篇のみ北史と逈かに異なるなり。又語に倫次無くんば亦た必ず北齊書の原本に非ず。武定五年、文襄の丞相を辭するより以後、北史に據れば尚ほ兩年の事有り、「武定七年八月始め盗に刺死せらる」と。今文襄紀は則ち丞相を辭して後、卽ち其の侯景に書を致すこと及び景の答書を敘す。下は卽ち文襄は魏靜帝に禮無きの事を敘す。又明らかには年月を書かず、但だ「七月晉陽に還り、盗に遇ひて殂す」と云のみなれば則ち文襄の卒は武定六年に在るに似たり。且つ文襄は鄴に卒す。而れども此れ「晉陽に還り、盗に遇ひ殂す」と云ふは則ち又晉陽に卒するに似たり。按ずるに文襄と侯景との往復の書は、本梁書景傳內に在り。文襄の靜帝に禮無きの事は、本北史靜帝紀內に在り。[此の事本北齊書高德政傳內に在り。北史は德政傳に於いて之を刪りて紀に著す。]

其の蘭京に刺死せらるるの一事も亦た卽ち北史文襄紀內に在り。蓋し書を補ふ者は全く北史を用ひて人の抄襲の迹を見るを恐る。故に此の紀に於いて諸書を雜へ取り、篇を成して以て小異を示すも、其の蕪雜不倫なるを知らざるなり。

按ずるに唐初は梁・陳・周・齊の諸史を修成すと雖も南北史有りて出づるよりして諸史は皆行はれず、大いに藏書に力めし家に非ざるよりは能く之れを備ふる者有ること罕なり。今傳ふる所の後魏書・北齊書皆宋初に內府本を取り、并せて天下の善本を募り校正刊行すること胡安國等の序に觀す。後周書に謂ふ「仁宗は太清樓本を出だし、史館秘閣本を合し、又天下の獻書を募り夏竦・李巽の兩家の本を得て始めて校正鏤板し以て行はる」と。是れ內府の藏、天下の大なること此の數本に過ぎず。周書此の若くんば、魏・齊書も亦た知るべし。有宋の版を樓せし時、度るに亦た必ず購募して以て其の缺軼を校せしならん。而るに已に遺失すること此の若し。見るべし、唐時に諸史の世に流傳する本は自ら多無きなり。今諸史は天下に徧きも、世其の殘缺は北史を取り之を補成するの事を知るもの有ること罕なれば則ち未だ嘗て南北史を取りて核對せざるの

み。

【語注】

○文宣紀―『北齊書』巻四文宣本紀。○北史―『北史』巻七齊本紀中文宣帝。○神武―『北齊書』巻一神武本紀上、巻二神武本紀下。○文襄紀―『北齊書』巻三文襄本紀。○廢帝―『北齊書』巻五廢帝本紀。○孝昭―『北齊書』巻六孝昭本紀。○武成―『北齊書』巻七武成本紀。○後主―『北齊書』巻八後主本紀。○北史―『北史』巻六齊本紀上、巻七齊本紀中、巻八齊本紀下。○武成紀一卷―『北齊書』巻七武成本紀。○後主紀一卷―『北齊書』巻八後主本紀。○北史―『北史』巻八齊本紀下。○皇后傳―『北齊書』巻九皇后傳。○北史―『北史』巻十四后妃傳下。○高祖十一王―『北齊書』巻十高祖十一王傳。○文襄六王―『北齊書』巻十一文襄六王傳。○文宣・孝昭……文宣・孝昭・武成・後主の諸子傳は『北齊書』巻十二に有る。○北史―『北史』巻五十二齊宗室諸王傳下。○趙郡・清河―『北齊書』巻十三趙郡王琛・清河王嶽傳。○北史―『北史』巻五十一齊宗室諸王傳上。○武定七年八……―『北史』巻六齊本紀上文襄帝に「七年…八月辛卯、遇盜而崩」と有る。○七月晉陽に……―『北齊書』巻三文襄本紀に「七月、王還晉陽。辛卯、王遇盜而殂、時年二十九」と有る。○梁書景傳―『梁書』巻五十六侯景傳。○北史靜帝紀―『北史』巻五魏本紀孝靜帝。○仁宗は太清……―舊本周書目錄序に「仁宗時、出太清樓本、合史餧祕閣本、又募天下獻書而取夏竦・李巽家本、下餧閣是正其文字」と有る。

【現代語譯】

『北齊書』も數卷が亡失したため、後人が『北史』から取って之を補った箇所がある。ためしに『北史』で該當箇所を比較してみるとおのずから容易にはっきりする。思うに『北史』は各史によって編修しているが、その間の文章を飾って增損しており、必ず大同小異があれば、決して一字も異ならないなどというものがあるはずがない。今『北齊書』の本紀内は惟だ文宣紀だけが『北史』と繁簡が互いに異なっていれば、これが原書であることは疑いない。神武紀や文襄紀の前半篇や廢帝・孝昭・武成・後主緯等の本紀の場合は『北史』と文字が互いに同じく、此れは絶對に原本ではない。文宣紀の後は一論、孝昭紀の後も一論だが、

しかし孝昭の論の前半篇はなお文宣の論である。之を『北史』の文宣・孝昭の二帝の總論と比較してみれば一字も違っていない。思うに『北齊書』の孝昭紀は論と倶に亡び、後人がとうとう『北史』内の孝昭の紀論を取って之を補ったのだろう。しかし論内は又未だ文宣の半篇を刪去していないので、兩卷の間に文宣の論が複出しているのである。武成紀一卷には論が無く、後主紀一卷には論が有って、その論は武成・後主に係り、合わさって一論となっている。之を『北史』の二帝の同卷の總論と比較してみればまた一字も違っていない。これも亦た『北史』を取って之を補ったのである。但だ卷を分ても未だ論を分けていないだけである。皇后傳もまた『北史』と文字が互いに同じである。惟だ『北史』は后傳以外に妃嬪をあわせ載せている。此の場合は但だ后傳が有って妃傳が無いと言う事で、恐らく亦た『北史』内から后傳を摘出しても妃嬪にまでは及ばなかっただけである。諸王傳は、『北齊書』は高祖十一王を一卷としているけれども論が無く、文襄六王を一卷として論が無く、文宣・孝昭・武成・後主の諸子は合わせて一卷として論が有る。その論は文襄の諸子をも内に重ね合わせている。之を『北史』と比較してみれば文字は互いに同じである。思うに『北史』は文襄の諸子から後主の諸子に至るまでもともと合して一卷であるために一論であった。こうして『北齊書』を補った者は但だ『北史』の各傳を取り、分けて二卷としたが、しかし論は未だ分けるに及ばなかった。だから文襄の諸子に傳が有っても論が無く、文宣以下の諸子に論が有って又文襄の諸子（の論）をも兼ねているのである。また宗室傳の場合は趙郡・清河の二王は另に一卷となっており、其の文字は『北史』と繁簡がそれぞれ異なっている。傳後の一論は專ら二王の爲に書かれており、これが『北齊書』の原本であることは疑いない。其の他の場合はまたもや『北史』から抄出しており、但だ卷を分けている事が少し異なっているだけである。『北史』の場合は齊の宗室と神武の諸子とが卷を同じくし、『北齊書』は神武の諸子を一卷とし、文襄の諸子の前に列ね、宗室傳は另に二卷とし、後主の諸子の後に置いている。趙郡・清河の一卷を除いては、その他の諸傳も亦た『北史』と文字がまったく同じである。思うに『北齊書』の原書の紀傳には多く亡失が有るけれども、目錄が具に殘っていたので『北齊書』を補った者は『北史』を取って原書の卷數にあわせ寄せ集めたのである。惟だ文襄紀の後半篇だけが『北史』とはる

かに異なっている。しかし言葉に倫次が無いから必ず『北齊書』の原本ではない。武定五年に文襄が丞相を辭退して以後も『北史』に據ればなお二年間あり、「武定七年八月始めに（文襄が）盜賊に刺殺された」と有る。（『北齊書』の）文襄紀の場合は、丞相を辭退して後にすぐに侯景に書信を送ったことと、侯景の答書を敘述している。以下は文襄が魏靜帝に對して禮の缺けた行いをした事を敘述している。そして明確には年月を書かずに、但だ「七月晉陽に還り盜に遇って殂した」と云うだけであれば、文襄の卒は武定六年だったようである。そのうえ文襄は鄴で卒したのに「晉陽に還り盜に遇って殂した」といったならば、まるで晉陽で卒したようである。考えてみるに文襄と侯景とが往復した書信はもともと『梁書』侯景傳内に書かれている。文襄が靜帝に對して禮が缺けていた事はもともと『北史』靜帝紀内に書かれている。［此の事はもともと『北齊書』高德政傳内に書かれていたが、『北史』は德政傳から之を刪って本紀に著したのである。］その蘭京で刺殺された事件も亦たとりもなおさず『北史』文襄紀内に書かれている。恐らく『北齊書』を補った者は全て『北史』を用いたことで、後人が抄襲の形跡を發見するのを恐れたのであろう。だから文襄紀に於いて諸書を雜え取り、篇を成して小異を示したのだけれども、かえってそれによって蕪雜不倫になってしまった事に氣付かなかったのである。

考えてみるに、唐初は『梁書』『陳書』『周書』『齊書』の諸史を修成したけれども、『南史』『北史』が書かれてからは德史は全く讀まれず、有力な藏書家でなければこれらの德史を所有できた者は罕であった。今傳えられている『後魏書』や『北齊書』は全て宋初に内府本を取り、并せて天下の善本を募って校正刊行したことは胡安國等が『後周書』の序に示して「仁宗は太清樓本を出し、史館祕閣本を合わせ、又天下の獻書を募り、夏竦・李巽の兩家の本を得て始めて校正鏤板して世に行われた」という。このように内府の藏書であっても、天下が廣大であっても此の數本に過ぎず、『周書』がこのようであれば、『魏書』『齊書』の場合もこのようであったことが分かる。宋王朝が版木を彫った時に必ず購い募ることを度り、その缺軼を校勘したけれども已に遺失していたことがこのようであれば、唐の時代の諸史で世の中に傳っていたものは、もともと多くはなかった事がわかるのである。今諸史は天下に徧く

流傳しているが、しかし世の人はそれらの書が殘缺して『北史』を取って之を補成した事實を知ることが罕であるから未だ嘗て『南史』『北史』と（諸史とを）比較しないだけである。

（齋藤　昭敏）

【原文】

17　周書

周書敘事繁簡得宜文筆亦極簡勁本令孤德棻所撰也德棻在當時修史十八人中最爲先進各史體例皆其所定兼又總裁諸史而周書乃其一手所成武德中詔修各史德棻已奉勅與庾儉修周書貞觀中再詔修諸史德棻又奉勅與岑文本修周書繼又引崔仁師佐修是同修者雖有數人而始終其事者德棻也李延壽南北二史亦先就正於德棻然後敢表上則可知德棻宿學爲時所宗矣今試取北史核對當後周時區宇瓜分列國鼎沸北則有東魏高齊南則有梁陳遷革廢興歲更月異周書本紀一一書之使閱者一覽了然北史雖亦兼記隣國之事然有書有不書者如高歡之死高澄之篡皆北隣大事也侯景之逆梁武簡文元帝之革易皆南隣大事也而北史周紀一切不書周書本紀則大統十三年書齊神武薨其子澄嗣是爲文襄帝十五年書文襄爲盜所殺十六年書齊文宣廢魏帝而自立其於蕭梁之事則於魏廢帝元年總書云侯景之克建鄴也奉梁武爲主梁武以憤恚薨景又立其子綱尋廢綱而自立綱弟繹討景擒之是爲元帝於恭帝元年又書梁將王僧辨陳霸先立梁元帝子方智爲主此皆北史周紀內所不書者而周書則紀載不遺以醒眉目此書法之最得者也宋齊梁陳及北齊書凡易代之際必有九錫文禪位詔陳陳相因可爲嘔噦西魏之遜於周當亦必有此等虛文而周紀不載更見其剪裁之淨他如趙貴等傳後總敘八柱國十二大將軍可見一代策勳之典蘇綽傳載其六條詔書及大誥全篇可見一代創制之事宇文護傳載其母子相寄之書千載下神情如見王褒傳載其寄周宏讓書庾信傳載其哀江南賦此二人皆以才著故特存之以見一班亦非如宋魏書之廣輯蕪詞徒以充卷帙也惟魏孝武之崩乃周文以其與明月公主亂故酖之周書但書魏孝武崩而不見被酖之事王羆當元顥入洛曾受其僞官而周書羆傳亦不書此未免意存隱諱宇文導傳侯景遣使請援朝議將應之乃徵導爲隴右大都督按景在河南距隴右二千餘里有何關涉據北史是時本令隴右大都督獨孤信往援侯景故移導於隴右也周書少此數語遂無頭緒又獨孤信傳云景寇荊州乃以信爲大使撫慰三荊尋除隴右大都督則又似信先往荊州後任隴右矣以北史參較則信本督隴右因有侯景之事故遣往荊州及景已入梁故信仍回隴右也周書亦不敘明宇文貴之子昕入隋爲功臣周書以其

爲隋臣則不入周傳可也乃又附於貴傳後既附傳矣則昕在周武帝時爲武帝決策攻克晉州及并州之戰武帝以失利欲還昕謂破竹之勢已成何可舍之遂再戰卽破晉陽此皆在周時功績也而昕傳又不書未免取舍失當又皇后傳每后必載其策立之文亦殊無謂至其編次各傳宇文測測子深及宇文神舉皆宗室也而不入宗室傳宇文孝伯深之子也又不附深傳而另爲卷王雄王謙父子也侯莫陳崇之與侯莫陳順尉遲迥之與尉遲綱李賢之與李穆趙貴之與趙善皆兄弟也而亦各分卷未免多費筆墨矣

【書き下し】

周書

周書は敘事 繁簡宜しきを得、文筆も亦た極めて簡勁。令孤德棻の撰する所に本づくなり。德棻 當時の史を修むる十八人中に在りては最も先進爲り。各史の體例は皆其の定むる所、兼ねて又諸史を總裁す。而して周書は乃ち其の一手に成る所なり。武德中、詔して各史を修めしむるに、德棻已に勅を奉じて庾儉と周書を修む。貞觀中、再び詔して諸史を修めしむるに、德棻又勅を奉じて岑文本と周書を修む。繼で又崔仁師を引き修むるを佐けしむ。是れ同に修むる者は數人有りと雖も、而れども其の事を始終する者は德棻なり。李延壽の南北二史も亦た先づ正を德棻に就く。然る後敢て表上すれば、則ち德棻の宿學、時の宗とする所爲るを知る可し。今試みに北史を取り核對すれば後周の時に當り、區宇瓜分し列國鼎沸す。北には則ち東魏・高齊有り、南には則ち梁・陳有り、遷革廢興、歲ごとに更まり月ごとに異なる。周書本紀は一一之を書し、閲者をして一覽了然たらしむ。北史は亦た隣國の事を兼記すると雖も、然れども書す有りと書せざる者有り。高歡の死・高澄の簒の如きは、皆北隣の大事なり。侯景の逆、梁武・簡文・元帝の革易は皆南隣の大事なり。而るに北史周紀は一切 書せず。周書本紀は則ち大統十三年に「齊の神武薨る。其の子澄嗣ぐ。是を文襄帝と爲す」と書し、十五年に「文襄 盜の爲に殺さる」と書し、十六年に「齊の文宣 魏帝を廢して自ら立つ」と書す。其の蕭梁の事に於ては則ち魏の廢帝元年に於て總て書して「侯景の建鄴に克つや、梁武を奉じて主と爲す。梁武 憤恚を以て薨る。景又其の子綱を立て、尋で綱を廢して自ら立つ。綱の弟繹 景を討ち之を擒にす。是を元帝と爲す」と云ふ。恭帝元年に於ても又「梁の將王僧辨・陳霸先 梁の元帝の子方智を立て主と爲す」と書す。此れ皆北史周紀の內の書せざる所の者なり。而るに周書は

則ち紀載は遺さず以て眉目を醒ます。此れ書法 之れ最も得たる者なり。宋・齊・梁・陳及び北齊書の凡そ易代の際には必ず九錫の文・禪位の詔有りて、陳陳相因るは、嘔噦と爲す可し。西魏の周に遜るは、當に亦た必ず此等の虛文有るべきも、周紀の載せざるは、更に其の剪裁の淨を見す。他の趙貴等傳の後に八柱國・十二大將軍を總敘するは、一代の策勳の典を見る可し。蘇綽傳に其の六條の詔書及び大誥の全篇を載すは、一代の創制の事を見る可し。宇文護傳に其の母子相寄すの書を載すは、千載の下 神情 見すが如し。王褒傳に其の周宏讓に寄すの書を載せ、庾信傳に其の江南を哀しむの賦を載するは、此の二人は皆才の著しきを以ての故に特に之を存し以て一班を見すが如きは、亦た宋・魏書の蕪詞を廣輯し、徒だ以て卷帙を充たすが如きに非ざるなり。惟だ魏の孝武の崩は、乃ち周文 其の明月公主と亂るるを以ての故に之を酖す。周書は但だ「魏の孝武崩ず」と書すのみにして酖せらるるの事を見さず。王羆 元顥の入洛に當り、曾て其の僞官を受く。而るに周書羆傳は亦書せず。此れ未だ意を隱諱に存するを免がれず。宇文導傳に「侯景 使を遣はして援を請ふ。朝議將に之に應ぜんとし、乃ち導を徵して隴右大都督と爲す」と。按ずるに景 河南に在り。隴右を距ること二千餘里。何の關涉有らんや。北史に據れば、是の時本より隴右大都督獨孤信をして往きて侯景を援けしむ。故に導を隴右に移すなり。周書は此の數語を少き、遂に頭緒無し。又獨孤信傳に「景 荊州を寇し、乃ち信を以て大使と爲し、三荊を撫慰す。尋で隴右大都督に除す」と云はば、則ち又信は先に荊州に往き、後 隴右に任ずるに似たり。北史を以て參較すれば、則ち信は本より隴右に督たり。侯景の事有るに因ての故に遣はされて荊州に往く。景已に梁に入るに及ぶが故に信は仍て隴右に回るなり。周書は亦た宇文貴の子昕は、隋に入り功臣と爲るを敘明せず。周書は其の隋臣と爲るを以て、則ち周傳に入れざるは可なり。乃ち又貴傳の後に附す。既に傳に附せば、則ち昕は周武帝の時に在りて、武帝の爲に策を決し、攻めて晉州に克つ。及び并州の戰に、武帝は利を失ふを以て還らんと欲するも、昕は「破竹の勢已に成る。何ぞ之を舍つ可けんや」と謂ふ。遂に再戰して卽ち晉陽を破る。此れ皆周に在るの時の功績なり。而るに昕傳は又書せず。未だ取舍當を失するを免かれず。又皇后傳には后每に必ず其の策立の文を載するは、亦た殊に謂無し。其の各傳を編次するに至りては、宇文測・測の子深、及び宇文神舉は皆宗室な

り。而るに宗室傳に入れず。宇文孝伯は深の子なり。又深傳に附せずして另に卷を爲す。王雄・王謙は父子なり。侯莫陳崇の侯莫陳順に與る、尉遲迥の尉遲綱に與る、李賢の李穆に與る、趙貴の趙善に與るは、皆兄弟なり。而るに亦各〻卷を分つ。未だ多く筆墨を費すを免れず。

【語注】

○武德中……『舊唐書』卷七十三列傳二十三に「中書令蕭瑀・給事中王敬業・著作郎殷聞禮可修魏史。侍中陳叔達・祕書丞令孤德棻・太史令庾儉可修周史」と有る。○貞觀中……『舊唐書』卷七十三列傳二十三に「貞觀三年、太宗復敕修撰、乃令德棻祕書郎岑文本修周史、中書舍人李百藥修齊史、著作郎姚思廉修梁、陳史、祕書魏徵修隋史、與尚書左僕射房玄齡總監諸代史。衆議以魏史既有魏收・魏澹二家、已爲詳備、遂不復修。德棻又奏引殿中侍御史崔仁師佐修周史、德棻仍總知類會梁・陳・齊・隋諸史。武德已來創修撰之源、自德棻始也。……尋有詔改撰晉書、房玄齡奏德棻令預修撰、當時同修一十八人、竝推德德棻爲首、其體制多取決焉。書成、除祕書少監」と有る。○齊の神武……『周書』卷二帝紀第二に「十三年春正月、茹茹寇高平、至于方城。是月、齊神武薨。其子澄嗣、是爲文襄帝」と有る。○文襄……『周書』卷二帝紀第二に「是歲、盜殺齊文襄於鄴、其弟洋討賊、擒之。仍嗣其事、是爲文宣帝」と有る。○齊の文宣……『周書』卷二帝紀第二に「夏五月、齊文宣廢其主元善見而自立」と有る。○侯景の建鄴……『周書』卷二帝紀第二に「侯景之克建業也、還奉梁武帝爲主。居數旬、梁武以憤恚薨。景又立其子綱、尋而廢綱自立。歲餘、綱弟繹討景、擒之。遣其舍人魏彥來告、仍嗣位於江陵、是爲元帝」と有る。○梁の將……『周書』卷二帝紀第二に「梁將王僧辯・陳霸先於丹陽立梁元帝第九子方智爲主」と有る。○趙貴等傳……『周書』卷十六列傳第八に「故今之稱門閥者、咸推八柱國家云。今并十二大將軍錄之於左」とあって、以下に八柱國と十二大將軍が列記されている。○蘇綽傳……『周書』卷二十三列傳第十五に「又爲六條詔書、奏施行之。其一、先治心。曰……。其二、敦教化。曰……。其三、盡地利。曰……。其四、擢賢良。曰……。其五、卹獄訟。曰……。其六、均賦役。曰……」と有る。○王褒傳……『周書』卷四十一列傳第二十三に「初褒與梁處士汝南周弘讓相善。及弘讓兄弘正自陳來聘、高祖許褒等通親知音問。褒贈弘讓詩、并致書曰。嗣宗窮途、楊朱歧路。征蓬

長逝、流水不歸。舒慘殊方、炎涼異節。木皮春厚、桂樹冬榮。想攝衞惟宜、動靜多豫。賢兄入關、敬承款曲。猶依杜陵之水、尙保池陽之田、鏟迹幽蹊、銷聲穹谷。何期愉樂、幸甚幸甚。弟昔因多疾、亟覽九仙之方。晩步世途、常懷五嶽之舉。同夫關令、物色異人。譬彼客卿、服膺高士。上經說道、屢聽玄牝之談。中藥養神、每禀丹沙之說。頃年事遒盡、容髮衰謝、藝其黃矣、零落無時。還念生涯、繁憂總集。視陰B日、猶趙孟之徂年。負杖行吟、同劉琨之積慘。河陽北臨、空思鞏縣。霸陵南望、還見長安。所冀書生之魂、來依舊壤。射聲之鬼、無恨他鄉。白雲在天、長離別矣。會見之期、邈無日矣。援筆攬紙、龍鍾橫集」と有る。○庾信傳…―『周書』卷四十一列傳第二十三に「信雖位望通顯、常有鄉關之思。乃作哀江南賦以致其意云」と有る。○惟だ魏の…―『北史』卷五魏本紀第五に「彌曰、過夜半則大吉。須臾、帝飲酒、遇酖而崩。時年二十五、謚曰孝武」と有る。○魏の孝武…―『周書』卷一帝紀第一文帝上に「閏十二月、魏孝武帝崩」と有る。○宇文導傳…―『周書』卷十列傳第二に「會侯景舉河南來附、遣使請援、朝議將應之、乃徵爲隴右大都督、秦南等十五州諸軍事、秦州刺史」と有る。○獨孤信傳…―『周書』卷十六列傳第八に「六年、侯景寇荊州、太祖令信與李弼出武關。景退、以信爲大使、撫慰三荊。尋除隴右十州大都督秦州刺史」と有る。○貴傳の後…―『北史』卷六十列傳四十八に見える。○破竹の勢…―『北史』卷六十列傳四十八に「及帝攻陷并州、先勝後敗。帝爲賊所窘、挺身而遁。諸將多勸帝還、忻勃然曰、破城士卒輕敵、微有不利、何足爲懷。今破竹形已成。奈何棄之而去。帝納其言、明日復戰、拔晉陽。齊平、進位大將軍」と有る。○宇文測…―兩名とも『周書』卷二十七列傳第十九。○宇文神舉―『周書』卷四十列傳第三十二。○宇文孝伯―『周書』卷四十列傳第三十二。○王雄―『周書』卷十九列傳第十一。○王謙―『周書』卷二十一列傳第十三。○侯莫陳崇―『周書』卷十六列傳第八。○侯莫陳順―『周書』卷十九列傳第十一。○尉遲綱―『周書』卷二十一列傳第十三。○尉遲迥―『周書』卷二十一列傳第十二。○李賢―『周書』卷二十五列傳第十七。○李穆―『周書』卷三十列傳第二十三。○趙貴―『周書』卷十六列傳第八。○趙善―『周書』卷三十四列傳第二十六。

【現代語譯】

『周書』はその內容が書くべき所は詳しく書き、省略すべ

き所は省略し、筆の運びもまた極めて簡潔で力強い。これは令孤德棻の撰する所に基づくものである。德棻は當時の史書を編纂した十八人の中では（編纂に對する考え方が）最も進歩的である。各史の體例は皆彼が定めた所で、また加えて諸史の編纂を監督した。そして『周書』は彼の一手で編纂された所のものである。武德中、各史を編纂する詔が下った際、德棻は既に勅を奉じて殂儉と『周書』を修めていた。貞觀中、再度諸史を編纂する詔が下された時、德棻はまた敕を奉じて岑文本と『周書』を修めていた。引き續きまた崔仁師を引き立ててその編修を補佐させた。このように編修を共にした人が數人いたとはいえ、しかしその作業に終始一貫して携わった人は德棻である。李延壽の『南史』『北史』の二史もまずその正確さを德棻に學んでいる。その後に敢てその書を上に奉れば、德棻の學識が、その時代の模範となるものであったことが分かる。今試みに『北史』を取り上げ比較してみれば、後周の時、天下はばらばらに分裂していて、列國は互いに覇權を競いあっていた。北には東魏と高齊があり、南には梁と陳があり、諸國の移り變わりやその興亡は、その歳ごとに更まり、月ごとに異なっているような有様であった。『周書』本紀はこの現狀を一つ一つ記していて、讀者が一見して理解できるようになっている。『北史』は隣國の事情を兼記することがあったとはいえ、しかし記錄しているものとそうでないものとがあった。高歡の死や高澄の簒奪のようなものは、皆北隣の一大事である。侯景の亂や、梁武帝・簡文帝・元帝の卽位は皆南隣の一大事である。しかし『北史』周紀ではこれらは一切記錄されていない。『周書』本紀では大統十三年に「齊の神武帝が崩御なされた。その子澄が後を嗣いだ。彼が文襄帝である」と書かれており、十五年に「文襄帝は盜賊により殺害された」と書かれており、十六年に「齊の文宣帝は魏帝を廢して自ら卽位した」と書かれている。その蕭梁の事については、魏の廢帝元年のくだりで「侯景が建鄴に打ち克った際、梁武帝を奉じて主とした。梁武帝は憤悲のため薨った。侯景はまた彼の子綱を擁立し、その後綱を廢して自ら卽位した。綱の弟繹は侯景を討伐し彼を擒にした。繹が元帝である」とそのすべてを言っている。恭帝の元年でもまた「梁の將である王僧辨・陳覇先は梁の元帝の子である方智を擁立し主とした」と書かれている。これは皆『北史』周紀の中では書かれていない部分である。しかし『周書』は紀載に遺漏はなく、人々の眉目を

醒めさせるものである。これこそまさしく書き方を最も會得しているものである。宋・齊・梁・陳や北齊書では王朝交替の時に必ず九錫の文・禪位の詔があり、腐った米を積み重ねるように言葉を書きつらねているのは、吐き氣をもよおすほどである。西魏が國を周に遜った際には、當然必ずこのような虚文があるべきであるのに、『周書』本紀に載せないのは、とりもなおさず『周書』の切り取って捨てることの潔さを示しているものである。その他の趙貴等傳の後に八柱國と十二大將軍を總敘しているのは、そこから當時の勳功を立てた人物の典型を見て取ることができる。蘇綽傳にその六條の詔書と大誥の全篇を掲載しているのは、そこから當時初めて作った制度の事蹟を見て取ることができる。宇文護傳にその母子が交わした手紙を載せるのは、千年の後に親子の誠の情愛を示すようなものである。王褒傳に彼が周宏讓に送った手紙を掲載し、庾信傳にその江南を哀しむの賦を掲載しているのは、この二人は皆その才能が顯著であるが故に特に取り立てて手紙と賦を記錄し、その才能の一端を示している、のようなものは、また『宋書』『魏書』が數多くの無用な言葉を廣く收集し、むやみやたらと卷帙を滿たしているのとは異なるのである。ただ魏の孝武帝の崩御については、周文（宇文泰）は孝武帝が明月公主と亂れたので、彼を毒殺した。（その點）『周書』はたんに「魏の孝武帝が崩御なされた」と記すだけで、毒殺されたことを示していない。王羆は元顥の入洛の際、かつてその僞官を受けた。しかし『周書』王羆傳ではまたそのことを書いてはいない。これはいまだはばかり隱そうとする意圖があることから免れてはいない。宇文導傳に「侯景は使者を派遣して援助を請い願った。朝議は侯景に答えようとし、そこで宇文導を召して隴右大都督とした」と有る。考えてみるに、（その時）侯景は河南にいた。（そこは）隴右から二千餘里距たった場所である。そこには何の關わりもない。『北史』に據ると、この時はもともと隴右大都督獨孤信を派遣して侯景を援護させた。だから宇文導を隴右に移動させたのである。（ところが）『周書』ではこの數語が缺けているので、結局その話の出だしがない。また獨孤信傳に「侯景が荊州を侵略した際、獨孤信を大使となし、三荊をいたわった。その後獨孤信を隴右大都督に任命した」と言っていれば、つまり獨孤信はまず先に荊州に行き、その後に隴右の都督に着任したようである。『北史』を以て比較してみれば、つまり獨孤信はもともと隴右の都督であっ

た。侯景の事件が原因で派遣されて荊州に行った。（その時）侯景は已に梁に歸服していたため、獨孤信は荊州から隴右に戻ったのである。『周書』はまた宇文貴の子の昕は、隋朝に入り功臣となったことを敘べ明らかにしていない。『周書』は彼が隋朝の臣下となったということで、『周書』の傳に入れないのはよろしい。つまり又『北史』宇文貴傳の後に附載している。既に傳に附載されていれば、宇文昕は周の武帝の時、武帝の爲に策略を立て、攻めて晉州に打ち克った。また并州の戰の時に、武帝は不利のため歸還しようとしたが、昕は「破竹の勢は已に成っています。いったいどうしてこれを捨て去ることなどできましょうか」と言った。その結果再戰して晉陽を破った。これは皆周にいた時の功績である。しかし昕傳ではこのことは書かれてはいない。（このことは）いまだその取舍選擇が的を得ていないことから免れてはいない。また『周書』皇后傳で、皇后ごとに必ずその策立の文を載せていることについては、ことさらそのいわれはない。その各傳を編次するに至っては、宇文測と測の子である深、及び宇文神舉は、皆宗室である。しかし宗室傳に入れていない。宇文孝伯は深の子である。また深傳に附載していなく別に卷を編んでいる。王雄と王謙は父子である。侯莫陳崇と侯莫陳順との關係、尉遲迥と尉遲綱との關係、李賢と李穆との關係、趙貴と趙善との關係は、皆兄弟である。しかしまた各〻卷を分けて編纂している。（これは）いまだその多くは筆墨を費すことから免れてはいない。

（河井　義樹）

【原文】

18　隋書

隋書最爲簡練蓋當時作史者皆唐初名臣且書成進御故文筆嚴淨如此南北史雖工然生色處多在瑣言碎事至據事直書以一語括十數語則尚不及也或疑其記事多遺漏如薛道衡死煬帝曰復能作空梁落燕泥否及李密牛角掛漢書併侍直仗下煬帝斥爲黑色小兒之類列傳中皆不書似覺疎略不知此皆事之叢碎無關係者不過世說及詩話中佳料本非正史所宜收删之正見其去取得宜未可輕議也又如裴矩入唐爲民部尚書何稠入唐爲將作匠陳茂入唐爲梁州總管此宜俟他日編作唐臣乃以其功績多在隋世遂爲立傳於隋書更見當時公論在人毫無忌諱虞世南在貞觀時寵遇甚優而其兄世基傳內直書罪惡不能稍掩尤見史筆之嚴也惟房彥謙在隋世本無事蹟可紀而特載其與張衡書數千百言敘爲佳傳未免以其子元齡時方爲相且總知諸史故稍存瞻狥耳張

衡與晉王廣謀簒文帝臨危時廣使衡侍疾俄而帝崩此何等事而衡傳不載僅於宣華夫人傳內附見之則亦未爲直筆至於韋孝寬雖立功於周然隋高祖攝政時尉遲迥懷異圖孝寬奉命馳往察變得其反狀乃亟西還每至驛輒驅傳馬而去復謂驛吏曰蜀公「卽尉遲迥」將至宜速具酒食迥果遣騎來追每驛無馬有盛饌遂追不及而孝寬得回使高祖嚴爲備則孝寬之盡心於高祖可知是隋史宜爲立傳而竟不書豈以周書內已有傳故不復複出耶然其子韋壽方立傳於隋書則孝寬有功於隋之處何妨於壽傳內敘入乃壽傳旣不敘入又於其從子韋藝傳內見之殊兩失矣李密歸唐封邢國公以其隋末嘗臣於越王侗故亦立傳於隋書然密入唐旋復被誅之事何以又不書此不可解伊婁謙一生事蹟俱在周宜編入周書盧思道事蹟半在齊半在周乃俱編入隋書亦覺無謂北史源師以孟夏龍見當雩高阿那肱聞之以爲眞龍出驚起問龍所在師曰此龍星見非別有眞龍也阿那肱怒曰漢兒多事强知星宿隋書則述阿那肱語曰何乃于知星宿此語殊不及北史之明爽通鑑來護兒奉命由海道征高麗猝聞楊元感反回兵擊之諸將以非詔旨爲疑護兒曰高麗之事小元感之患大如以違命見責我自任之遂回破元感隋書但云元感作逆護兒勒兵與宇文述等擊破之此語似不如通鑑之有正氣

【書き下し文】

隋書

*隋書は最も簡練爲り。蓋し當時の作史者は、皆唐初の名臣。且つ書成れば御に進む。故に文筆嚴淨たること此くの如し。南北史は工然たると雖も生色する處多く瑣言碎事に在り。事に據りて直書し、一語を以て十數語を括くるに至りては則ち尙ほ及ばざるなり。或ひは疑ふらくは其の記事多く遺漏あらん。薛*道衡死して、煬帝 復た能く 空梁 燕泥を落つ を作るや否やと曰ひ、李*密の牛角 漢書を掛け併せて仗下に侍直するに及び、煬帝斥けて黑色小兒と爲すの如き類は列傳中皆書かず。疎略を覺うに似る。知らず、此れ皆事の叢碎無關係なる者、世說及び詩話中の佳料に過ぎず、本より正史の宜しく收むべき所に非ず。之を刪るは正に其の去取の宜しきを得たるを見すにて、未だ輕るがろしく議すべからざるなり。又*裴矩の唐に入り民部尙書と爲り、何稠の唐に入り將作匠と爲り、陳茂の唐に入り梁州總管と爲るが如きは、此れ宜しく他日 唐臣を編作するを俟つべきに、乃ち其の功績多く隋世に在るを以て、遂に爲に隋書に立傳す。更に當時の公論人に在りては毫も忌諱する無きを見る。*虞世南 貞觀の時に在りて寵遇さるること甚だ優る。しか

るに其の兄世基の傳内、罪惡を直書し稍掩する能はざるは、尤も史筆の嚴なるを見すなり。惟だ房彥謙 隋世に在りては、本より事蹟の紀すべく無くして、特だ其の 張衡に與ふるの書 數千百言を載せ、敘して佳傳と爲すは、未だ其の子元齡の時に方に相爲りて、且つ諸史を總知するを以ての故に稍や瞻狥を存すを免れざるのみ。張衡と晉王廣と簒を謀り、文帝危に臨みし時、廣 衡をして疾に侍せしめ、俄にして帝崩ず。此れ何等の事ぞ。而るに衡傳は載せず、僅かに宣華夫人傳内に之を附見すれば、則ち亦 未だ直筆と爲さざるなり。韋孝寬に至りては功を周に立つと雖も、然れども隋の高祖攝政の時、尉遲迥 異圖を懷き、孝寬命を奉じ馳せ往き變を察し、其の反殂を得れば、乃ち亟かに西して還り、驛に至る毎に輒ち傳馬を驅して去り、復た驛吏に謂ひて曰く、蜀公［卽ち尉遲迥］將に至らんとす。宜しく速やかに酒食を具へよ、と。迥果して騎を遣りて來り追はしむに、驛毎に馬無く盛饌有れば、遂に追ひて及ばず。而して孝寬回るを得、高祖をして嚴に備へを爲さしめれば、則ち孝寬の心を高祖に盡すこと、知るべし。是れ隋史宜しく爲に傳を立つべきに、竟に書かず。豈に周書内已に傳有るを以て故に復た複出せざるや。然るに其の子韋壽 方に隋書に立傳すれば、則ち孝寬隨に功有るの處、何ぞ壽傳内に敘入するを妨げんや。乃るに壽傳既に敘入せず、又其の從子韋藝の傳内に於いて之を見るは、殊に兩つながら失せり。李密唐に歸して邢國公に封ぜらるも、其の隋末嘗て越王侗に臣たるを以て故に亦傳を隋書に立つ、然るに密唐に入り、旋つて復誅せらるの事は何を以て又書かざるか。此れ解すべからず。伊婁謙一生の事蹟、俱に周に在れば宜しく周書に編入すべく、盧思道の事蹟半ば齊に在り、半ば周に在るに、乃るに俱に隋書に編入するは亦謂はれ無きを覺ゆ。北史に源師 孟夏 龍見るを以て、當に雩すべしとし、高阿那肱之を聞き以て眞龍出づると爲し、驚き起ち龍の所在を問ふに、師は、 此れ龍星見る。別に眞龍有るに非ざるなりと曰ひ、阿那肱怒りて 漢兒事多し、强いて星宿を知る、と曰ふは、隋書は則ち阿那肱の語を述べて、何ぞ乃ち干めて星宿を知らん、と曰ふ。此の語殊に北史の明爽たるに及ばず。通鑑に、來護兒命を奉じ海道由り高麗を征すに猝かに楊元感の反すを聞き、兵を回し之を擊つ。諸將詔旨に非ざるを以て疑ひを爲す。護兒曰く高麗の事は小、元感の患は大なり。如し命に違ふを以て責せらるも、我自ら之に任ぜん、と。遂に回り元感を破る、と。隋書は但だ元

感逆を作し、護兒兵を勒して宇文述等と之を擊破す、と云ふのみ。此の語通鑑の正氣有るに如かざるに似る。

【語注】

○隋書は最も……隋書は、書名、八十五卷。唐の貞觀三年の敕を奉じ、魏徵等が編纂した帝紀五卷・列傳五十卷に、李淳風等が編纂した五代史志三十卷を加えたもの。南北史は、『南史』と『北史』、ともに書名。『南史』は八十卷。唐の李延壽の編。南朝の宋・齊・梁・陳の四朝の史を記す。『北史』は百卷。唐の李延壽の編。北朝の北魏・北齊・周・隨の四代の史を記す。○薛道衡死し……薛道衡は、字は玄卿、河東汾陰の人。『隋書』卷五十七列傳第二十二薛道衡傳に傳有り。煬帝は、諱は廣。一名を英。隨の二代皇帝。『隋書』卷三帝紀第三煬帝上・卷四帝紀第四煬帝下に傳有り。この故事は『隋唐嘉話』に「煬帝善屬文、而不欲人出其右、司隸薛道衡由是得罪。後因事誅之曰、更能作空梁落燕泥否」と有る。「空梁 燕泥を落つ」は、薛道衡の「昔昔鹽」に「暗牖懸蛛網、空梁落燕泥」と有る。○李密の牛角……李密は、字は法主。『隋書』卷七十列傳第三十五李密傳・『舊唐書』卷五十三列傳第三李密傳・『唐書』卷八十四列傳第九李密傳に傳有り。『隋書』の傳內には「開皇中、襲父爵蒲山公、乃散家彥產賙親故、養客禮賢、無所愛吝。與楊玄感爲刎頸之交。後更折節、下帷耽學、尤好兵書、誦皆在口。師事國子助教包愷、受史記・漢書、勵精忘倦、愷門徒皆出其下。大業初、授親衞大都督、非其所好、稱疾而歸」と有るが、『舊唐書』には「密以父蔭爲左親侍、嘗在仗下煬帝顧見之退謂許公宇文述曰、向者左仗下黑色小兒爲誰。許公對曰、故蒲山公李寬子密也。帝曰、箇小兒視瞻異常勿令宿衞。他日述謂密曰、弟聰令如此當以才學取官、三衞叢脞非養賢之所。密大喜因謝病。專以讀書爲事時人希見其面。嘗欲尋包愷乘一黃牛被以蒲韉、仍將漢書一帙掛於角上、一手捉牛靷一手翻卷書讀之。尚書令・越國公楊素見於道從後按轡躡之、既及問曰、何處書生耽學若此。密識越公乃下牛再拜自言姓名。又問所讀書答曰項羽傳。越公奇之與語大悅謂其子玄感等曰、吾觀李密識度、汝等不及。於是玄感傾心結託」と有り、『唐書』には「密趣解雄遠多策略、散家貲養客禮賢不愛藉。以蔭爲左親衞府大都督・東宮千牛備身。額鋭角方瞳子黑白明澈、煬帝見之謂宇文述曰、左仗下黑色小兒爲誰。曰、蒲山公李寬子密。帝曰、此兒顧殂不常無入衞。它日述諭密曰、君世素貴當以才學顯、何事三衞閒哉。

密大喜謝病去、感厲讀書。聞包愷在緱山往從之。以蒲韉乘牛、挂漢書一帙角上行且讀。越國公楊素適見于道按轡躡其後曰、何書生勤如此。密識素下拜。問所讀、曰項羽傳。因與語奇之。歸謂子玄感曰、吾觀密識度、非若等輩。玄感遂傾心結納。嘗私密曰、上多忌隋歴且不長。中原有一日警、公與我孰後先。密曰、決兩陣之勝、噫嗚咄嗟、足以讋敵、我不如公。擥天下英雄馭之、使遠近歸屬、公不如我」と有る。○又裴矩の唐……裴矩は、字は弘大、河東聞喜の人。『隋書』巻六十七列傳第三十二裴矩傳に傳有り。隋末、宇文化及・竇建德に仕え尚書右僕射等と爲るが、竇氏が敗れた後、唐に歸順し民部尚書と爲った。何稠は、字は桂林。『隋書』巻六十八列傳第三十三何稠傳に傳有り。隋末、宇文化及・竇建德に仕え工部尚書と爲るが、竇氏が敗れた後、唐に歸順し將作匠と爲った。陳茂は、河東猗氏の人。『隋書』巻六十四列傳第二十九陳茂傳に傳有り。同傳には隋高祖の受禪に及び「拜給事黄門侍郎、封魏城縣男、每典機密。在官十餘年、轉益州總管司馬、遷太府卿、進爵爲伯。後數載卒官」と有り、又同巻の茂の子政の傳に「宇文化及之亂也、以爲太常卿。後歸大唐、卒於梁州總管」と有り、唐に入り梁州總管と爲ったのは茂ではなく、その子の政と知れる。○虞世南 貞觀……虞世南は、字は伯施、越州餘姚の人。叔父、寄の家を繼いだため、字を伯施という。『舊唐書』巻七十二列傳第二十二虞世南傳・『新唐書』巻一百二列傳第二十七虞世南傳に傳有り。虞世基は、字は茂世。隋の内史侍郎。『隋書』巻六十七列傳第三十二虞世基傳に傳有り。その惡行は傳内に「于時天下大亂、世基知帝不可諫止、又以高熲・張衡等相繼誅戮、懼禍及己、雖居近侍、唯諾取容、不敢忤意、盜賊日甚、郡縣多沒。世基知帝惡數聞之、後有告敗者、乃抑損表狀、不以實聞」等と有る。○惟だ房彦謙……房彦謙は、字は孝沖、本清河人。『隋書』列傳第三十一房彦謙傳に傳有り。張衡に與えた書は同傳内に「黄門侍郎張衡、亦與彦謙相善。于時帝營東都、窮極侈麗、天下失望。又漢王構逆、罹罪者多。彦謙見衡當塗而不能匡救、以書諭之曰」と有り、以下に載せられている。張衡は、字は建平、河内の人。『隋書』巻五十六列傳第二十一張衡傳に傳有り。元齡は、房玄齡のこと。名は喬、玄齡は字。或いは名は玄齡、字は喬とす。名は齊州臨淄の人。貞觀四年、長孫無忌に代わり尚書左僕射と爲り、國史を監修す。『舊唐書』巻六十六列傳第十六房玄齡傳・『唐書』巻九十六列傳第二十一房玄齡傳に傳有り。○張衡と晉王……廣は後

の煬帝。宣華夫人は、陳氏、陳宣帝の女。『隋書』卷三十六列傳第一后妃宣華夫人陳氏傳に傳有り。傳內に「初、上寢疾於仁壽宮也、夫人與皇太子同侍疾。平旦出更衣、爲太子所逼、夫人拒之得免、歸於上所。上怪其神色有異、問其故。夫人泫然曰、太子無禮。上恚曰、畜生何足付大事、獨孤誠誤我。意謂獻皇后也。因呼兵部尚書柳述・黃門侍郎元巖曰、召我兒。述等將呼太子、上曰、勇也。述・巖出閤爲勑書訖、示左僕射楊素。素以其事白太子、太子遣張衡入寢殿、遂令夫人及後宮同侍疾者、竝出就別室。俄聞上崩、而未發喪也」と有る。○韋孝寬に至…―韋孝寬は、名は叔裕、孝寬は字。京兆杜陵の人。字を以つて行われる。『周書』卷三十一列傳第二十三韋孝寬傳に傳有り。傳內に「及宣帝崩隋文帝輔政、時尉遲迥先爲相州總管、詔孝寬代之。又以小司徒叱列長乂爲相州刺史先令赴鄴。孝寬續進至朝歌、迥遣大都督賀蘭貴齎書候孝寬。孝寬留貴與語以察之、疑其有變遂稱疾徐行。又使人至相州求醫藥密以伺之。既到湯陰逢長乂奔還。孝寬兄子魏郡守藝又棄郡南走。孝寬審訐其狀乃馳還。所經橋道皆令毀撤、驛馬悉擁以自隨。又勒驛將曰、蜀公將至、可多備餚酒及芻粟以待之。迥果遣儀同梁子康將數百騎追孝寬、驛司供設豐厚所經之處皆輒停留、由是不及」と有る。隋の高祖は、諱は堅、弘農郡華陰の人。『隋書』卷一帝紀第一高祖上・卷二帝紀第二高祖下に傳有り。尉遲迥は、字は薄居羅、代の人。『周書』卷二十一列傳第十三尉遲迥傳に傳有り。韋壽は、字は世齡。『隋書』卷四十七列傳第十二韋壽傳に傳有り。韋藝は、字は世文。孝寬の兄の子。『隋書』卷四十七列傳第十二韋藝傳に傳有り。傳內に「及高祖爲丞相、尉迥陰圖不軌、朝廷微知之。遣藝季父孝寬馳往代迥。孝寬將至鄴因詐病止傳舍、從迥求藥以察其變。迥遣藝迎孝寬。孝寬問迥所爲藝黨於迥、不以實答。孝寬怒將斬之、藝懼乃言迥反狀。孝寬於是將藝西遁、每至亭驛、輒盡驅傳馬而去。復謂驛司曰、蜀公將至、宜速具酒食。迥尋遣騎追孝寬追人至驛、輒逢盛饌又無馬、遂遲留不進。孝寬與藝由是得免。高祖以孝寬故弗問藝之罪、加授上開府、卽從孝寬擊迥、及破尉惇、平相州、皆有力焉」と有る。○越王侗―煬帝の子 元德太子昭の子。字は仁謹。大業二年越王に立てらる。『隋書』卷五十九列傳第二十四に傳有り。○伊婁謙一生…―伊婁謙は、復姓。字は彥恭、本は鮮卑の人。隋文帝受禪の後、大將軍と爲り、爵は公に進む。『隋書』卷五十四列傳第十九伊婁謙傳に傳有り。盧思道は、字は子行、范陽の人。隋の開皇初年、母の老いを理由に職を

離れるが、また徵せられて散騎侍郎と爲る。『隋書』卷五十七列傳第二十二盧思道傳に傳有り。○北史に源師…—源師は、字は踐言、河南洛陽の人。『北史』卷二十八列傳第十六源師傳・『隋書』卷六十六列傳第三十一源師傳に傳有り。高阿那肱は、善無の人。『北齊書』卷五十列傳第四十二恩倖傳內に傳有り。『北史』源師傳に、「孟夏以龍見請雩。時高阿那肱爲錄尚書事、謂爲眞龍出見、大驚喜問龍所在云、作何顏色。師整容云、此是龍星初見、依禮當雩祭郊壇、非謂眞龍別有所降。阿那肱忿然作色曰、漢兒多事、强知星宿。祭事不行」と有り、『隋書』源師傳に「孟夏、以龍見請雩。時高阿那肱爲相、謂眞龍出見、大驚喜、問龍所在、師整容報曰、此是龍星初見、依禮當雩祭郊壇、非謂眞龍別有所降。阿那肱忿然作色曰、何乃干知星宿。祭竟不行」と有り、『北齊書』高阿那肱傳に「尙書郎中源師嘗諮肱云、龍見、當雩。問師云、何處龍見、作何物顏色。師云、此是龍星見、須雩祭、非是眞龍見。肱云、漢兒强知星宿。其牆面如此」と有る。また『春秋左氏傳』桓公五年夏の傳に「龍見而雩」と有り、龍は東方蒼龍宿、雩は求雨の祭祀。○通鑑に來護…—通鑑は、『資治通鑑』のこと、書名、二百九十四卷、宋の司馬光の著。來護兒は、字は崇善、江都の人。『隋書』卷六十四列傳第二十九來護兒傳に傳有り。楊元感は、楊玄感。隋の司徒素の子。『隋書』卷七十列傳第三十五楊玄感傳に傳有り。『資治通鑑』卷一百八十二隋記六 煬皇帝中大業九年に「來護兒至東萊、聞玄感圍東都、召諸將議旋軍救之。諸將咸以無敕不宜擅還固執不從。護兒厲聲曰、洛陽被圍心腹之疾、高麗逆命猶疥癬耳、公家之事知無不爲、專擅在吾不關諸人、有沮議者軍法從事。卽日迴軍。令子弘・整馳驛奏聞。帝時還至涿郡、已敕護兒救東都、見弘・整甚悅。賜護兒璽書曰、公旋師之時、是朕敕公之日、君臣意合、遠同符契」と有り、『隋書』來護兒傳に「出滄海道、師次東萊、會楊玄感作逆黎陽、進逼鞏・洛、護兒勒兵與宇文述等擊破之」と有る。

【現代語譯】

『隋書』の記述は最もよく簡潔であり、こなれている。思うに、當時の史書を作った者たちは、皆唐初の名臣であるし、又、史書が完成した後は陛下の御前に進上してご覽になって頂いたので、そのために、これ程に文體が嚴淨であるのだ。『南史』『北史』は文章が巧みであるとはいえ、しかし生き生きと表現された場所の多くは細かな下らないこ

とである。ある事件を根據としてその事を直書し、十數語を一語で括くって書いてしまうことに關しては、やはり『隋書』には及ぶものではない。また、おそらくは、『隋書』の記事は多く漏れ書かれていない所があろう。薛道衡が死ぬと、煬帝が「これで再び『空梁 燕泥落つ』のような素晴らしい句を作ることができるのか」と言い、李密が牛の角に『漢書』を掛けて、併せて仗下に侍直していると、煬帝が彼を斥けて「黑色小兒」と言ったような類の話は『隋書』の列傳の中にはどれも書かれていない。疎略であるとも思われる。（しかし）いったいこれらは皆、事件の細々とした本質には無關係なもので、『世說』や『詩話』の中のおもしろい材料に過ぎないものなので、本來正史が收錄すべき內容ではないのであり、これを刪って書かないでいるのは、まさにその記錄すべき記事の去取選擇が當を得ていることをしめすのであって、輕るがるしく議論する事ではない。又、裴矩が唐に入って民部尙書となり、何稠が唐に入って將作匠となり、陳茂が唐に入って梁州總管となったような話は、後日に唐臣の傳を編作するのを待って、そこに書くべきであるのに、その功績が多く隋の時代に在ることから、そのまま『隋書』に傳を立ててしまっている。（『隋書』は）更に當時の公論は人臣に在ってはまったく忌諱される事が無かったのが見られる。虞世南は貞觀の時に在っては（皇帝太宗に）寵遇されることが甚だ優れていたが、其の兄の世基の傳內には、彼の罪惡を直書していて、それを隱し立てすることは不可能である。ここに史家の筆法の最も嚴しい態度があらわれている。惟だ、房彥謙は隋の世に在っては、本よりその事蹟の記錄すべきものが無いので、ただその張衡に與えた書の數千百言を載せて、それを敘して佳傳とするのは、その子である房玄齡がその時まさに宰相の地位にあって、且つ諸史の編纂の過程を司っていたので、そのために顏色を窺うことを免れ得なかっただけのことである。張衡と晉王廣とが簒奪を謀り、文帝が危險な狀態にあったとき、廣は衡に文帝の看病をさせ、その後しばらくして文帝が崩御されたことなどは、これは大變な事件であるが、衡の傳には載せずに、僅かに宣華夫人の傳內にこれを載せているだけなのは、また、正直に書いているとはいえない。韋孝寬に至っては功績を周に立てたとはいえ、しかし隋の高祖が攝政していた時、尉遲迥が反逆の意志を懷いていて、孝寬は命を奉じて尉遲迥のもとへ馳せ往き、異變を察し、其の謀反の內容を得ると、ただちに

西へ還り、驛に至る毎にすぐさま傳馬を走らせて去り、復た驛の役人に「蜀公［つまり尉遲迥］が今にもお越しになるので、すぐにおもてなしの用意をしておいた方がいい」と言い、迥が果して騎馬を遣わして孝寛を追わせて來ると、驛毎に馬は無く、もてなしの料理が用意されていたので、そのまま追いつくことはできなかった。そうして孝寛は回ることができ、高祖に嚴重に備えをもうけさせたのであるから、孝寛の高祖に心を盡すことは、知ることができよう。これは『隋書』が彼のために傳を立てるべき内容であるのに、ついに書かなかった。どうして『周書』に已に孝寛の傳が有るからといって、また書かないでいるのか。それならば、其の子の韋壽がまさに『隋書』に傳が立っているので、孝寛が隋朝に功績が有ることを壽の傳内に書き入れる事にどうして妨げが有ろうか。それでいて、壽の傳には已に書き入れずにおき、其の從子の韋藝の傳の中でこの事が見られるのは、まったく兩方の傳とも事を失しているといえよう。李密は唐に歸順して邢國公に封ぜられたが、隋末に嘗て越王侗に臣服していたのを理由に『隋書』に傳を立てているが、それでいてその後、唐に入って、かえって誅殺された事はどうして又書かないでいるのか。これも理解できないことである。伊婁謙の一生の事蹟は、すべて周の世に在るので（彼の傳は）『周書』に編入するべきであり、盧思道の事蹟は半分は齊の世に在り、半分は周の世に在るのに、すべて『隋書』に編入しているのは、謂われのない事と思われる。『北史』で「源師が孟夏に龍が現れたことから、雨乞いをすべきであるとしたのに、高阿那肱はこれを聞いて、本物の龍が現れたものだと思い、驚いて立ち上がり、何處に龍がいるのかと問うのに、源師は、龍星が現れたのであって、別に本物の龍がいるのではありません、というと、阿那肱は怒って、漢兒は事を難しくしてわざわざ星宿の事を知っていると、いった」といった記事は『隋書』では阿那肱の語を述べて、「なんでわざわざ星宿の事など知っていようか」という。この語はまったく『北史』の記事の明爽であるのに及んでいない。『資治通鑑』には、「來護兒が命を奉じて海道から高麗を征伐するのに、急に楊玄感が反亂を起こしたのを聞き、兵を回してこれを攻撃するのに、諸將が聖旨の内容に違反することから、護兒の行動を疑ったのに、護兒は『高麗の事は小さく、玄感の患は大きい。もし陛下の命に逆らう罪を責められるのであれば、私自身がその責任をとろう』と言って、そのまま兵を

返して玄感を破った」とあるが、『隋書』ではただ「玄感が反逆し、護兒が兵をととのえて宇文述等とこれを撃破した」というだけである。この『隋書』の語では『資治通鑑』の活き活きとした文章には及ばないようである。

（田中　良明）